

村上博輔日記抄 十四

自大正十三年四月一日
至大正十五年一月二十一日

大正十三年

四月一日 火 晴 (前略) 午後植木屋ガ来テ桃ト蜜柑
トヲ学院ノ庭ニ移ス。是デ此ニ株モ安定ノ立場ヲ得タ。朝
〈W・J・M・〉クラッグ、〈H・F・〉ウヅ〈ウオース〉
氏ト見ニ来ル。(後略)

四月二日 水 雨 午前学院ニ往ク。入学試験ニ関スル
諸準備ヲ視察ス。(後略)

四月三日 木 曇小雨 (前略) 〈村上〉 醇造成績発表、
トホツタト大喜ビ、新シイ帽子ヲ買ハサレ服モ靴モ注文シ
テ来ル。

四月四日 金 晴 入学試験始マル。院長室デ昨日受
取ッテ今朝廻シタ願書其他今朝来タモノガ五十通ホドアッ
テ柴野〈秀夫〉氏ガ来ヌノデ大混雑、三十分後レテ八時半
カラ試験ヲ始メル。英和、和英(中略) 午後一時〈村上〉

醇造入学式〈村上〉 八重連レテ行ク。(中略) 朝〈村上〉
植三消費組合ニ往キ〈村上〉 醇造ノ用具一切購入、〈村上〉
醇造ニ担ハセテ戻ル。計十九円二十銭、ソレニ靴代帽子代
洋服代柔道着ノヤウナモノマデ入レルト、ヨシ十円近クナ
ル、入学金月謝一学期分生徒会費ヲ入レルト六十円ヲ出ヨ
ウ。学校モヤスクハヤラヌ哩。(後略)

四月五日 土 晴 国漢ト作文ノ試験、親子井ノ昼飯ヲ
ヨバレテ午後人物試験五時前帰ッテ来ル。大ニ疲レタ。(後
略)

四月六日 日 曇小雨 朝顔ヲ洗ヒ居タル所ヘ受験者一
人ガ来テ昨日ノ人物試験ヲ受ケズニ帰りマシタ、六日ニア
ルト思ウテ居マシタ、何如シマセウカト云フ。アワテモノ
チャガ受験票ニモ罪ハアル。明日来ヨト云ウテ返ス。中央
〈講堂〉デ話ヲスル(改悔ト宗教)。最初ノ試デ何如カト思

ヒ、ソレニ入齒ヲ忘レテ往ッテ困ッタと思ウタガ、到々了
スルコトヲ得タ（幾度カ声尽キントシ、又口ガ縮ルヤウナ
感ハシタガ）ヨクナッタモノト思フ。（後略）

四月七日 月 晴 成績調査デ晩マデカ、ル。

四月八日 火 晴 朝齒ガ痛ムノデ牛乳ト卵トラクトー
ゲントダケ吞ンデ出ル。九時カラ教授会まむしヲ饗バレテ
午後ニ互ル。進級者ノ決定ヲシテ帰ッタノハタ刻デアッタ。
幸ニ齒痛ガ止ンダ。夜中ニ目ガ醒メタトキ入学者人名ノ中
一人間違ノアッタコトニ氣ガツキ眠ラレズカルモチンヲ服
ム、（中略）〈村上〉醇造初メテ学校ニ行ク。

四月九日 水 晴 朝カラ四度学院ニ往ク。芝野^{マデ}（秀夫）

氏ヲ待ッテ姓名ノ間違ッテ居ル所ヲ改メ成績発表ヲ済マス。
其カラ種々ノ調ベヲ終リ昼飯ヲ食ベタノガ二時デアッタ。
（後略）

四月十一日 金 晴 九時カラ始業式、広告ヲサセラレ
ル。寺田ヲ留級サスヤウニ相談ガアル。疲労ガ出テ何トモ
角トモ言ヘヌホド苦シイ。（後略）

四月十二日 土 曇 札拝別々ニ話、（機会ニ就テノ）
ヲスル。二年漢文ハ業ヲ始メタ。三年ハ筆記ノ準備ガナイ
ノデ此次カラニスル。（後略）

四月十三日 日 雨 札拝松本（益吉）ノ話。（後略）

四月十四日 月 曇 時間割急ニ変ッテ大弱リシタガ
一二時間ノ業、ソレカラ札拝ヲ済マセテカヘル。（後略）

四月十五日 火 曇 札拝ニ出ナンダ。先日中ノ疲労ガ
出テ声ガ出ン。神学一年ハ教科書ガ無いノデ休ンダ。（後
略）

四月十六日 水 雨 一年ノ二組ニ最初ノ心得ヲ話シタ
ノデ声ガ出ヌヤウニナリ午後ノ二時間モ大ニ困ル。（後略）

四月十九日 土 晴 母上昨日ノ如ク苦マレズ、只スヤク
ト寝ラレル、脈搏異同ナシ、数少シク減ジタリ、四時間ニ
学校ヘ出タキリ終日ノ看護スル。（後略）（注二十日老母死
去）

四月二十三日 水 晴 （前略）午後同志社ト高等部ノ
野球ガアルト云ウテ小児等見ニ往ク、八対四ノ勝ノヨシ。

四月二十六日 土 晴 午前一寸学校ヘノゾイテ月曜カ
ラ出ルコトヲ告ゲ総務部デ手形ヲ貰ヒ銀行ニ行ク、（後略）

四月二十七日 日 晴 留守番シテ教会ニ出ズ。京都青
年会ノ栗原氏ノ話アリタル由、（中略）昨日ト今日青年会
ノ部会ガアッテ京都カラモ人々ガ来タ。（後略）

四月二十八日 月 晴 二時間カラ四時間マデブツ続ケ
チャベルノ話ノ番マデ当ッテ居ッタ。大弱リ、午後湯ニ往ッ
タガ兎ニ角大弱リ脚モ立タンヤウナ氣ガシテ晚餐後直ニ寝

ル。

四月二十九日 火 晴 体ガ非常ニ倦ク大ニ困ル、脈搏モ百ヲ超エ疲労ガマダ治ランノダラウ、時間割ノ間違デ三時間出ル必要ナカッタノニ出ル、午後二時カラ関西大学ト野球ガアツテ見ニ往ク。三時ニ往ツタガマダバツチングノ練習ヲヤツテ居テ五回ノ表マデ見テカヘル。十二対〇ノ勝ち、頭ノ工合ガ余程ヨカッタ。(後略)

四月三十日 水 雨 第二外国語ニツキ社会科三年ノモノ要求アリ、(H・F・)ウヅ(ウォース)ニ話ス、(後略)

五月二日 金 晴、雨 (前略) 午後教師会議、(村上)醇造等応援ノ練習大騒シテ返ル、夜ハミル館小供ノ会、(村上)醇造行ク。

五月三日 土 雨 東風ハゲシク雨ヲ飛バス、大講堂ニ往カナンダ、(中略) 新人生ノ歓迎会ガ一時カラ同窓会ガ七時カラアツタ、共ニ往カナンダ、(中略) 朝箱木一郎君訪ネテ来タ。

五月四日 日 曇小雨 朝六時ニ兵庫ヘ集ルノヂヤト(村上)醇造ガ一人デ食事シテ急イデ往ク。須磨ニ角力ガアルノデアル、戸ヲ閉ヂテ朝ノ礼拝ニ一同出カケル。松本(益吉)氏ノ話。(後略)

五月五日 月 雨 朝往カウト思ウテ見レバ課業ヲ皆考

ヘ損ツテ居タ。アハテ、本ヲサゲテ往ク。其デハナカッタ。図書館デ借リテ源氏ヲ講ジ礼拝ノ時間ニ詩ヲ選択スル、ソレカラハマアヨカッタガ三時間終ツテ帰ラウトスルトコロヘ住吉中学校長元田龍佐氏訪ネテ見エ横堀ノコトニ就キ問合サル、午後ノ課業ガ済ンデ湯ニ往ク、昨日ノ角力⁽²⁾デ寺本ガ優勝、二等モ関西(学院)ノモノデアッタト云フコトヲ寺田カラ聞ク。(後略)

五月八日 木 雨曇 村松生今日ヨリ登校ス、但シ時間割変更ノタメ業ヲ受ケズ。夜七時ヨリ亡母ノ記念祈祷会ヲ開ク、(中略) 日高佐七氏ニ返事。(後略)

五月九日 金 晴 四時間継続ノ課業デ声出デズ大ニ困ル。(中略) 運動場ヘ出ルト高商ト中学部ト野球ヲヤツテ居ル、中学部ハマルデ物ニナラン、二三回見デカヘル。

五月十二日 月 晴 礼拝ノ司会ヲスル、岸波(常威)サンノ話。午後ノ時間ニ生徒ガ二三人シカ居ラン、仏国軍艦ヲ見ニ往ツテモ可イト云フ揭示ガアツタカラ皆行ツタト云フ、居ルモノダケデヤルト業ヲ始メタラ続々ト皆出テ来タ。(後略)

五月十五日 木 晴 突然チャペルガ中ル。世ノ中ハ騒ガシイモノ、然シ其中ニ又静カナ心ノ見エソメタルハ賀スベシ。今回ノ選挙ハ国民ガ煽動ヤ干渉ニ乗ラズ静ニ考ヘテ

自ラ選バントスル所ヲ選ンダモノデアル、世ハ騒グガ騒ギハ何事ヲモ為シ得ヌモノデアル。事ハ静ニ図リ静ニ行クノヂヤ、新ヲ追ウテ騒グバカリハ誰デモスル、野蠻人デモ、落着ガ出来タ所ニ文明ハアル、学生モカラ騒ギニ浮カレル心ヲ捨テ、落着イテ勉強セヨト云フコトヲ話ス。(後略)

五月十七日 土 晴曇 (村上) 醇造鍋蓋山ニ遠足、(中略) 文学部モ方々ニ旅行ガ許サレテ今日休トナル、(後略)

五月二十六日 月 晴 チヤペルデ話ヲスル、文久三年長藩士ガ蘭国軍艦ヲ砲撃シタ話ヲシテ、其真面目デ元氣ガアツタコトヲ称揚シ、今ハ其ガ一般的ニハ衰ヘタト云フコトカラ元氣ハ生命ヂヤ、碎ケテモ伸ビル、其ガ無イ奴ハ利巧デモ^(おわり) 竟ニハ倒レテオ陀仏ヂヤ、元氣デ真面目ナノハ愛ラシイ、排日ハ利巧デ心ノ分ラヌコトヲスルカラ嫌ハレルノヂヤ、殊ニ今ハ不マジメデ居ラレル時代デハナイ、否不真面目ハ必ズ内ノ貪弱ナ所ニ発スル、無能ノ奴ガテレカクシニヤルノヂヤ、故ニ不真面目ノ氣分ガ起レバ警戒セヨト話シタ、総務部デ金受取り(中略) 関西(学院)ノ北側ヲ散歩シテ居タトキ二本多丈夫(フルイ中学部ノ卒業者)君ニ逢フ。明石ニ住ンデ東神倉庫神戸支店ニ務メテ居ルト云フ。

五月二十七日 火 晴 礼拝ノ司会今田(恵)氏、話ガ

ナイト云フカラ河上(丈太郎)サンガ見エタノニ頼ム。(後略)

五月二十八日 水 晴 朝登校礼拝ヲ済マシテ新宅ヲ見ニ往キ帰ツテ四時間ノ業ヲスマシテ帰ル。一安訥氏カラ牧師ヲ止メタ理由書ノ印刷シタノヲ貰フ。(後略)

六月七日 土 曇雨 頭ノ工合少シ悪シ聯合チヤペルデ、吉崎(彦一)サンガ新十誠ト云フモノヲ紹介シタ、今頃ノ人ノ言フコトヲ集メタヤウナモノヂヤ、一年タテハ陳^(ちん)ビル、十誠モ糞モノナイ、ヨク此ンナ拙イ新シガリヲスル人ヂヤ。(後略)

六月八日 日 曇 礼拝松本(益吉)氏、何デモ無イコトヲ勢ヨク話スコトガ上手ヂヤ。(後略)

六月九日 月 晴 (H・F・)ウヅ(ウオース)氏モ出ズ、チヤペル当番ノ吉岡(美国)サンモ出ヌノデ(H・P・)ジョ^(ン)ス氏ニ話ヲシテ貰フ。(後略)

六月十日 火 晴 (前略) (H・F・)ウヅ(ウオース)氏ヨリ畑(歛三)氏ガ帰リタイカラ用キヨト神崎(驥一)、吉岡(美国)等ガ熱心ニ勧メル、何如セウカト云フ話ガアツタ、鉄面皮以上ヂヤ。

六月十一日 水 晴 (前略) 夕刻松本(益吉)氏畑(歛三)氏ニ関スル意見ヲ聞キニ来ル。

六月十四日 土 晴 声ガ出ンデ困ツタ、聯合チャペル
デ加奈陀ノ農商務次官ト云フ人ガ話ス、愛嬌ヲ振蒔イテ日
本ノ移民ヲ歓迎スルハ大出来、三戸（吉太郎）氏急病ト聞
キ訪ネル積リデ停車場マデ往ツタガ如何ニモ歩マレズ帰ッ
テ床ニ就ク、少シク眠ッテ講演大会ヘ往ッテ見タガ又帰ル。

（後略）

六月十六日 月 晴 声ガ出ニクカッタ、チャペルデ話
ヲスル、神ニ依ッテ生キル心ニ生レ替ラネバ排日ノヤウナ
コトハ止マスト現代人心ノ悪化、世界實際ノ軋轢ニ就テ話
ス。（後略）

六月十七日 火 曇 夜六時カラ永井柳太郎氏ノ歡迎ヲ
明海（ビル）デヤルカラ来テクレト云フ、同窓会神崎（驥
一）氏カラ知ラセテ来タノデ往ク、電車カラ降りテ道ヲ迷
フ、八階ノ食堂ニハ段々古イ人ガ来テ居タ。阿保栄次郎氏
ニモ逢フ、永井（柳太郎）ノ話ハ選挙ノ実情ヲ種々ト聞イ
テ面白カッタ、九時ニ帰ル。（後略）

六月十八日 水 晴 比較宗教今日デ了ル、秋カラ支那
ヲヤル、午後二時間アマリ寝テ御影ニ往キ三戸（吉太郎）
ヲ訪ネル、今日二度痙攣ガ起キタト云フ、痙攣ト云フノハ
充血シテ半身不随ニナルコトヲシイ、手当ノコトナド夫人
ニヨク話シテカヘル、夜ヨク寝タ。

六月二十一日 土 晴 午後二年生ノ野外劇⁽⁴⁾ガアルノ
デ皆見ニ往ク、地藏経由來、ツマラスモノヂヤ（劇トシテ
ハ）、只ア、シテ遊ンダノヂヤト思ヘバ罪ガ無イ、（後略）

六月二十二日 日 曇雨（前略）帰ッテカラ皆々礼拝
ニ出ル、柳原（正義）ノ話。（後略）

六月二十四日 火 晴 学生大会（日米問題）ヲヤッ
テ居ルノデ課業ナシ。（後略）

六月二十五日 水 晴 今日始メテ薬ナシニ声ガ出ル、
総務部デ月給ヲモラウテ来ル、午後三時カラ（神戸）一中
ト関（西学院）中ノ野球試合ガアル、十回ノ表デ二点入レ
ラレ四対二ニテ負ケル。大試合ホド人ガ見ニ来タ。（後略）

六月二十六日 木 晴 北国ト五平ヲ見テクレト竹中
（郁三郎）ガ頼ンダノデ午後其ヲ讀ミ批評ヤ要点ヲ書イテ
渡スノデ午後ノ時間ヲ大ニ取ラレタ、近頃ノモノ、書イタ
劇ト云フモノヲ始テ読ンデ見タガ話ランモノデアアルノミナ
ラズ全デ無識ノ奴ガ筆ヲ執ルノヂヤカラ物ニナラス。（後
略）

六月二十七日 金 晴雨 午後六時ヨリ平和楼デ（H・
F・）ウヅ（ウォース）氏ノ晚餐、其前二雷雨ガシタノデ
傘ヲモツテ往ク。食フトキモ帰ッテ後モ大ニ降ツタガ途中
ハ往復トモ傘守デアッタ、帰路（H・P・）ジョンス氏ト

一緒ニナツタ。

六月二十八日 土 晴雨 今日デ休ニナル、チャペルハ別々デ吉岡〈美国〉サン日米問題ニツイテ話ス、但シ少シモ趣意ガ分ラヌ話デアッタ、午後教会、婦人会デ〈村上〉八重往ク。(後略)

六月二十九日 日 晴 〈関西学院〉教会柳原〈正義〉ノ話、其後デ真鍋〈由郎〉氏ノタメ祈祷会ガアッタガ通告ガ聞エナンダノデ帰ル。(後略)

六月三十日 月 晴 朝真鍋〈由郎〉ト松本〈益吉〉ヘ見舞ニ往ク。(後略)

七月六日 日 晴 〈前略〉〈関西学院〉教会田中貞ノ話ガアッタガ予ハ往ク能ハズ。(後略)

七月八日 火 晴 〈前略〉夜中学部同窓会、一円出シテ一円五十銭位ノ料理ヲ饗バレテ来ル、多クノ人ガ行テ居タ、新シイモノガヨク話シタ、武田孟ニ会ウタ。

七月十日 木 晴 午前総務部ニ至リ銀行ニ至リ貰フモノヲ貰ヒ預ケルモノヲ預ケテカヘル、(中略)朝〈村上〉醇造学校デ腕ヲネヂラレ先生ガ返レト云ハレタト云ウテカヘル。午後其生徒謝罪ニ来タ、二人連デ来テ悪イ方ハ外ニ居ッテヨイ奴ガアヤマリヲ述ベテカヘル(村上)八重ニ)。(後略)

七月二十七日 日 晴 〈関西学院〉教会松本〈益吉〉氏説教、暑イノデ困ル。(後略)

七月二十八日 月 午後驟雨 病弱ヲ押シテ少シヅ、書ク老子ノ学今日出来上ツタ。(後略)

七月三十一日 木 晴 〈前略〉午前小野(神学生)論文ニツイテノ注意ヲ問ヒニ来ル、芝野(マヅ)〈秀夫〉氏来ル答ナリシガ来ズ、鐸木ノ書面ヲ郵送スル。(後略)

八月十八日 月 晴 〈前略〉斉藤ガ青山学院カラ転校シタイト云フ人ヲツレテ来ル。(後略)

九月五日 金 曇 則武氏訪ネテ来ル、社会科ヘデモト云フコトデアッタカラ、河上〈丈太郎〉氏ノ方ヘ送ル。

九月六日 土 晴 朝則武氏社会科ヘ入学ノ意志アルコトヲ告ゲテ来ル、午後始テ湯ニ往ク、(注今夏劇烈ナル脚気症ニ冒サル、入浴等中止シアリシモノ)其留守ヘ松本〈益吉〉氏訪ネテ来ル、何カ用事ガアルト云フコトナレバタ飯ノ後ニ訪ネテ往ク、途中デ〈W・J・M・〉クラック氏ニ逢ヒ種々ノコトヲ話サレル、脚動カズ、漸ク松本〈益吉〉マデ往ク則武ノコトデアッタ。

九月十日 水 半晴 学校始マル、然シ今日カラ業ノアルコトヲ部長モ教師モ忘レテ居「然デスカ」ト云フ調子(既二四年モ為来ッテ居ルコトヲ)、ソレニ時間割ガ多ク変

更シテアルノデ業ガ出来ズ、八時半カラ式ヲヤツテスマス。
生徒曰ク、学期ノ初デモナイニ何ノ式カト。則武来ル、河
上〈丈太郎〉氏ニ答ヘテ貰フ。健忘ノ西洋人ハ意見ナシ、
顔ハヨサ、ウナト云フ。(後略)

九月十二日 金 曇雨 朝暴風雨直ニ止ム、学校デ四時
間、ソレニ突然チャベルノ話ヲ頼マレテ早魘ノ感ヲ話ス。
四時間目ノ中頃カラ声嘎レントシテ苦シム。(後略)

九月十四日 日 晴 礼拝柳原〈正義〉ノ話、〈中央〉
講堂ノ梯子ガ登リニクカッタ。(後略)

九月十五日 月 雨 一年ヲ繰上ゲテクレト云フノデ小
使ニ本ヲ取ニ来テ貰ウテスマス。余リ持物ガ多イノデ置テ
往タノデヤ、今日ハ歯痛デ時々水ヲ含ンデハ堪ヘタ。(後略)

九月十六日 火 晴 神学デ国文ヲヤツテ居ルトキ窓ノ
下デ子ヲ啼カス女ガアルノデ大声出シテ見タガ聞エナンダ。
然シアチラヘ往タ。声ガドウモヨク出シ。(中略) 藤井〈秀
樹〉ノ細君死ンデ葬式ガアルト聞イタガ得行カナンダ。

九月十八日 木 雨 (前略) 朝チャベルデ(H・F・
ウヅ〈ウォース〉氏ノ朝鮮談ヲ聞ク、米宣教師カラ聞イタ
コトヲ話シタノデヤ、其宣教師ハ三十年朝鮮ニ居ルガ朝鮮
人ノ心ハ分ラント云ウタゲナ。英米宣教師ハ己デ頭ガ塞ツ
テ居ルノデヤカラ人ノ心ナドハ分ラン、巡査ノ取調ヲ批評

シタコロナドコチラモ可笑イガ批評スルヤツノ愚モオカ
シカッタ。(後略)

九月二十二日 月 晴 午後玄関ノ障子ヲ張ル。一年B
真島勲、高野山デ自殺ヲシタト云フ噂ヲ聞ク

九月二十三日 火 晴 午後中学部ノ前デホツケーノ試
合ガアルト云フノデ往テ見ル、阪神クラブト何トカノ、半
時過マデ見タ、蹴球トゴルフヲ混合シテ作ッタモノト見エ
ル、丸井藤吉ト光打トノ別々ニ逢タ。(後略)

九月二十六日 金 晴 (前略) 朝思想史ノ残リヲ書イ
テ綴デテ往タ、(中略) 商科ノ前ニ珍ラシイ蘭ガアッタノ
デ真鍋(由郎)氏ヲ連レテ来テ堀ラセタ

九月二十八日 日 晴 (前略) 高(等)商(業学部)
デテニスノ大会ガアルノヲ一寸見タ、関(西学院)中(学部)
三回戦ニ勝ツテ居タ、(中略) 関(西学院)中(学部)優
勝戦ヘ出タガ負けテ審判ガ無茶チャト云ウテ喧嘩シタ、応
援ガ。

九月三十日 火 晴 午後所得税ノコトデ税務署ヘ往ク
ツモリデアッタガ少シ時間ガ遅イノデ、又一年ノ漢文ノ試
験ヲ今日は非見ネバナランノデ止メタ。(後略)

十月三日 金 晴 嫌ニ暑イ日。午後作文ヲ預ッタノデ
上野(謙介方ナリ)ヘ持テ往キ往復学院ノ野球校内大会ヲ

少シ見ル、夕刻〈村上〉謙介来テ高野へ宿泊等ノコト問合セテクレト云フノデ食後手紙ヲ書イテ秋月氏ニ出ス

十月四日 土 雨 授業今日デ終ル、午後少シ熱氣アリ
(七、一)湯ニ往カズ、按摩来ル、夜五時時半カラ中央講堂デ同窓会、木村、葉、井上龍生、福井、新宮ノ五氏外カラ来ル。教師デハ河上〈丈太郎〉サンダケ、同窓会聯盟加入ノ件、三十五年記念ノ件相談、スキ焼一円二十銭、十時ニ床ニ入ル、〈村上〉醇造雄弁大会へ出タ。

十月五日 日 曇 中央講堂ニテ話ヲスル(教会ニ対スル現代ノ意識)。試験ガ始ルノデ誰モ来マイト思ウタガ能ク集マツタ。家ヲ出ントスル時ニ中岡生ガ書物ノ不審ヲ尋ネタイト云ウテ来タガ午後来レト云ウテ返ス、七色インコノ剥製ヲ自分ガ拵ヘタノヂヤト云ウテ貰フ、午後四五年前ノ一年ニ一寸入タコトガアルト云フ片山ト云フ青年ガ訪レテ来テ暫ク談ス、来年カラ再ビ入学スルト云フコト、爾来神經衰弱ニカ、ツテ自殺マデ企テルニ至ツタト云フ経路ナドヲ話ス、津川ニ学者ラシイ人ハ誰カト聞イテ訪ネテ来タト云フコトナドヲ話ス、種々ノ談話ヲシテ別レタ。

十月七日 火 雨 試験始マル、午後神学一年ノ問題ヲ忘レテ居タノデ書イテ吉崎〈彦二〉氏ノ宅ニ持テ行ク。河上ハ丈太郎ノ氏ニ記念ノコトニ就テ意見ヲ話ス。(後略)

十月八日 水 雨 (前略) 秋月和尚ヨリ返信、中学部へ廻ハス

十月十日 金 晴 〈村上〉醇造六甲へ遠足ニ行ク、〈村上〉謙介モ嵯峨へ行ク。

十月十一日 土 晴 一年ト二年漢文ノ試験ヲヤル、午後湯ニ往クト按摩モ来テ居タ、採点イソガシ。

十月十二日 日 晴 〈関西学院〉教会柳原〈正義〉。(後略)

十月十三日 月 晴 今日デ試験済ム、採点ヲヤル、午後二時ヨリ四季会ガアツテ往ク。其後教会独立ノ相談ガアツタト云フガ往カス。午前柳原〈正義〉教員室ニ来テ伝道ガ振ハヌノヲ人ガ知ツタコトノヤウニ不平ヲ言ウテ帰ツタ。

十月十五日 水 晴 (前略) 神学部カラ論文ヲモテ来ル、今年ノ別科ハ駄目カト思ウテ居タラ近頃デ一番ヨク書イテ居ル、夜マデカ、ツテ見ル。

十月十六日 木 雨 風 学院三十五年記念式。⁽⁷⁾フロツクコトデ往ク。院長室デ中〈村〉賢〈二郎〉ニ逢フ。次デ永井柳太郎自動車デ来ル、県庁ヤラ市役所ヤラカラ来ル、〈中央〉講堂ノ上デ池田氏ニ逢フ、九時ニ式始マル。頌歌、聖書松本〈益吉〉、〈T・H〉ヘーデン、祈祷吉岡〈美国〉、〈C・

J・L・ンペーツノ学校ノ来歴（羅馬字文ヲ讀ム）、二十年以上ノ勤続者ニ記念ヲクレルト云フノデ理事会長（D・R・ンマッケンジー其宣告ヲヤル。同窓カラ指図セラレテ洪々ニ極メタコトヲ百年前カラ計画デモシテ居タヤウニ喋ベル。西洋人ハ口ノ人間ヂヤ。ソレカラ永井（柳太郎）ノ談、次ニ祝電、文部大臣カラ。次ニ知事代理、市長代理ガ祝辞ヲ種々ノ読方スル。同窓代表デ西村祐弁ガシヤベル所デ少モ意味ノ無イコトヲ云フ。其ヲ無理ニ面白ガルノハ信者ノ男女。食堂デ立食。長谷（基一）、乾（精末）其他種々ノ人ニ逢フ、（中略）夜永井（柳太郎）ト乾（精末）ノ演説会。風ガ強イノデ行カナンダ。

十月十七日 金 曇 運動会、（中略）ソレカラ皆ヲ往カセ（ネクタイガ無カッタリシテ暇ガカ、ツタ）、其後家ヲ鎖シテ出ル。中学校ノリレーヤラ野試合、中隊教練モ見タ。絵画ヲ見ル。中学部ノハヨイ。（中略）文科デ聞イタ専門部ノハ駄目。未来派ノガ多クアッタ。（村上）謙介等モ共ニ会シテソレカラ明海（ビル）ヘ同窓会ニ出テ往キ、二十年勤続ノ紀念品目錄ヲ貰フ。帰ッテ寝タノハ十一時

十月十九日 日 雨（前略）〈関西学院〉教会ニ行カズ。田中貞氏ノ説教。

十月二十日 月 晴 午後ノ時間ヲ繰上ゲテスマス。一

年ノ教科書ガ無クナッタノデ生徒ノヲ見テヤル。湯ニ往ク。

十月二十一日 火 曇 チャペルガアリ再入学ノ件ニ就キ法令ヲ取調ベル要事ガアッタノデ午前中学校ニ居ル。話ハ三十五年ト云フコトデ話シタガ時間ガ来テ意ヲ尽サナンダ。三好生ガ教師ト破裂シマシタト云ウテ信仰意見ヲ輿論ニ問フト方々ニ張出シタガ読マス中ニ誰カ、皆メクツテ仕舞ウタ、此間カラ氣ニカ、ツテ居タ廣文庫ヲ聞イテ見ルト果シテ誰カ、持テ帰タノデアル。無責任ナ話ヂヤ、午後按摩来ル。

十月二十三日 木 曇 午後高野山（大学）カラ弁士ガ来ルデ三時ニ茶ヲ飲ミニ神学部図書室ヘ集レト云フノデ往ク。次デ五時半啓明寮デ歡迎晚餐ヲ食フカラ来イト云フノデ往キ、卓上演説十数番、校歌、松風連吟、マンドリン等デ稍晩クナリ、オマケニ腹ノ工合ガ悪ク夜ヨク眠ラレナンド。

十月二十四日 金 晴 午後一時カラ高野（山大学）ノ講演、菩提心ノ研究（内山秀道）、密教ニ於ケル象徵主義ト其背景（芳井芳純）、印度仏教デハナイ思想上ニ於ケル仏教ノ地位（蓮澤淨淳）、真言ノ仏陀ト其實現（梅尾祥雲）、題ハ新シイヤウデモ少シモ新シイコトハナイ、極メテ大體的ナツマランモノデアル。ソレニ信念ナク学識モ貧弱ラシ

イカラ救ハレス。高野（山大学）ノ話八年々下落スル。夜
杏香楼デ支那料理、注文ガ下手デヤカラ工合ガ悪カッタ。

龜德（二男）氏ガ一人物識デ而モ何ニモ識ラズニ喋ッテ居タ。

十月二十^{（マ）}六日 土 晴 礼拝ノ時間ニ金貰ヒニ往ク。

銀行ヘモ往ッテ来ル。次デ高野山大学ノ講演ガアル。涅槃
論（坊岡）、三密思想ノ考察（大北善照）、真言ノ仏陀ト其
実現ニ（梅尾祥雲）、済ンデカラ写真ヲ撮リ東京庵ノ前ノ
レストラントヘ往ッテ一同洋食、ソレデ別レトナル。講演
ハ皆其極ッテ居ルコトヲ話スノデ大綱要ナ創意ノナイ話デ
アル。去年ノ話モ去ル年ノ話モ要スルニ同ジコトデアルガ、
聞ク奴ガ分ランノト忘レルノトデ珍ラシガラレル。蓋シ真
言トシテハ此以外ニ説クコトハ無イノトスルト豊富ナヤウ
ナ貧弱ナ氣ガスル。尤モ其処ニ大日如来ガ現レ、バ一句デ
モ足ルガ彼等ノ言ハ口ノ先カラ出ルノデアルカラ、何ヲ言
ウテモ如来ノ存在ハ認メラレズ却テ種々ノ醜穢ガ付纏ウテ
居ル。（後略）

十月二十七日 月 曇 午後教師会議アリ、夕刻マデ
カ、ル。中村ノ再入学其他クダラヌ相談ガアッタ。

十月二十九日 水 晴 午後ノ時間ヲ二時限ニ繰上テク
レヨト云ウテ来テ急ニ変ヘル。午後矢張り熱ガ七、二アッ
タガ湯ニ行ク。少シ氣持ガ悪カッタガ悪クハナカッタ。十

乗ヲ開イテ少シ合ハンノデ種々ニシテ午後ノ時ヲ費ス。余
計ナコトデヤガ乗カ、リト云フモノ。

十月三十一日 金 晴曇 拝賀ニ往クト祈祷ヲサセラレ
ル。今田（恵）ノ話。其後ニ近畿共励会ガアル。感冒ノユ
エニ帰宅ス。庭球大会モアル、（中略）スベテ見ズ、（後略）

十一月二日 日 晴 〈関西学院〉教会（C・J・L・
ベーツ氏説教。（後略）

十一月三日 月 晴曇 商科ノ生徒ガ体育日ヂャト云ウ
テ頭カラ教室ニ入ラズ、仕方ガナイカラ二時間限授業ヲ止
メルコトニシタ。其仲間ニ（H・F・）ウヅ（ウォース）
サンガ強迫サレテ矢張り二時間カラ休ニナル。特ニ体育ニ
関スル催事ヲセヌ以上、授業ヲセメテ半日位ハヤル筈ト思
ウテ居タノニ怠慢デ^{（イ）}ヤ^{（イ）}退屈デ^{（イ）}デハ意味ガナイ。（後略）
十一月四日 火 曇雨 （前略）庭球リーグ戦アリシモ
往カズ。（後略）

十一月五日 水 午後曇 神学部々会ニテ休。（後略）

十一月七日 木 晴 今日ハ暖ナリ。午後（村上）謙介
来ル。文学部カラ講演ニ往クコトヲ頼シテ来テ田中（義弘）
ニ相談シタヲ許サレヌト云ウタト云フ。夕飯ヲ済マシテ又
往ッテ相談スルコトニナッテ居ルト云ウテ帰ル。田中（義
弘）ハ馬鹿デアル。何モ知ラズシテ只賢サウニスルコトヲ

知ッテ居ル。

十一月八日 土 曇 チヤベルデ今泉ノ話ヲ聞ク。何ノ意味モ無い詭弁デアル。私ハ斯ウ思フト云ヘバマダヨイガ、基督教ノオシヘハ是ヂヤト云フカラ滑稽ニナル、(中略) 中学部弁論大会、(村上) 醇造夕飯タベテ晩ク帰ル

十一月九日 日 小雨 礼拝松本(益吉)氏(中略)(村上) 謙介今日浜寺トカ大浜トカニ学生角力ガアッテ監督ニ往ッタ。(後略)

十一月十二日 水 晴 啓明寮ニ往ク。二階ノ方ニ種々ナ陳列ガシテ有ツタガ下品ノコトバカリ、仏国オリンピツクノアルバムガ並ベテアッタ。チヤベルノ式デ(C・J・L・)ベーツノ話。二次会食堂デテーブルスピーチ、順々ニ面白クモナイ痴言バカリデ予ハ啓明ト云フ話ノウケヲ話シタガ、何故話シタカ解ツタモノハアルマイ。今日ハ勤儉週ノ肉無シデ¹ヂヤガ御馳走ガアッタ、校内ハ治外法権。

十一月十四日 金 午後曇 夜映画会(社会学会ノ催)、案内ヲ貰ウタノデ皆往ク。誰ヤラノ大望、嵐ノ国ノテス、後ノ方ハ基督ノ誠ガ所謂信徒ニヨッテ行ハレズ、未信者ノ中ニ行ハレテ居ルコトヲ諷シタモノデ大ニ宜カッタ。テスト云フ女ハ面白イ奴デアッタ。

十一月十五日 土 晴 午後国際聯盟協会関西学院学生

支部ノ催デ姉崎(正治)氏ノ話ガアッタガ、(村上) 八重ガ婦人会デ出タカラ行カナンダ。(後略)

十一月十七日 月 晴 (前略) 中央講堂デ賀川(豊彦)氏ノ話ガアッタガ往カズ。(後略)

十一月十九日 水 晴 一年時間ヲ繰上ゲテクレヨト云ウテ来テ二時間目ニ往ク。五時半カラ理事ト会食。(S・E・ヘーガー、(W・R・)ウエキリー、(W・A・)ウキルソ¹²、(R・C・)アームストロング氏等ニ逢フ。

十一月二十日 木 曇雨 波多野傳四郎氏ガチャベルニ来テ話ス、(関西学院) 教会デ話スヤウニ朝鮮ヤ支那ヲ見テ来テ伝道ノ必要ガアルト云ウタ。(後略)

十一月二十三日 日 晴 (関西学院) 教会ニ往カズ留守番スル、(村上) 謙介講演旅行ニ今朝出発スル。

十一月二十五日 火 晴 神学(部) 上級伝道旅行ニツキ休ミ。(後略)

十一月二十六日 水 晴 朝学校へ出テ見三戸(吉太郎)ヲ訪ネテ弔慰スル、午後一年B組ヲ教ヘル。(後略)

十一月二十七日 木 晴 哲学科ハ旅行ニ、二年ハ箕面ニ往ッテ休ニナル。(後略)

十一月二十八日 金 晴 学校へ一時間出テ来テ腫物ノ手当ラシテモラフ、終日落着カヌ日、夜晚ク(村上) 謙介

帰ル。(後略)

十一月二十九日 土 晴 聯合礼拝米澤牧師ノ話。其後同窓会ヨリノ紀念品ヲ貰フ。大ギナ箱入り。帰ッテ開クト置時計ドイッ製。十五分毎ニ□ヲ打ち時間ナレバ其後鐘ヲナラス。斯ノ如キモノヲ座敷ニ置カウトハ永久ニ考ヘテ居ナカッタ、我ヲ忘レテ務メテ居レバ神ハ今同窓生ヲシテ此裝飾ヲ贈ラシメタマウタ。(後略)

十二月一日 月 晴 朝学校ニ出ルト談ノ番ガ張出シテアルト云ハレテ談ヲスル。頭ノ手当ヲシタ跡デ痛ンデ苦シカッタ。午後学校カラ帰ルト八度ニ昇ッテ居タ。(後略)

十二月二日 火 晴 午後七度三分ニナル。デ又湯ニモ往カズ引籠リ。夕刻吉崎〈彦一〉サン来テ一年ノ追試験ノ問題ヲクレヨト云ハレル。極メテ嚴格ナラザル所ノモノガ形式ヲ嚴格ニスルト云フガ実ハ余リ形式ヲ嚴格ニ求メルカラ内部ノヤツガ崩レルノデヤ。

十二月三日 水 晴 問題ノコトヲ忘レテ居テ朝取りニ来ル、困ッテ即題ヲ渡ス。

十二月四日 木 晴 礼拝ノ後文学会ノ総会ヲヤッテ学生ガモガリ合フ。課業ヤスミ、今ノ学院当局ハ此評ノ限デナイ。(後略)

十二月五日 金 晴 (前略) 午後英文学会ガ集ルト云

フノデ休ム。(後略)

十二月六日 土 曇 午後谷水、小林ノ二人学生会分離ノコトヲ話シニ来ル、暫ク他ノコトヲモ話シテカヘル。(後略)

十二月七日 日 晴 松本〈益吉〉氏説教、久シ振ニ〈関西学院〉教会ヘ出ル。(後略)

十二月八日 月 晴 午前大藤〈豊〉氏ヨリ一同決心ノ意味ヲ聞キ、午後同氏ノ訪問ヲ受ケル、折節不在ナリシタメ同氏ヲ訪フ、初メ学校ニ訪ネ後上野ヲ尋ネル、在所不明帰路、河上〈丈太郎〉氏ヲ訪ネル、不在、夜訪ネテ来テモラフ。(後略)

十二月九日 火 晴 朝〈H・F・〉ウヅ〈ウオース〉氏ト暫ク談話、其前二年ノ国文ヲ休ンデ大藤ハ豊〴〵氏ヲ訪フ、帰りニ加藤ノ所マデ送ッテ貰フ。其前中村氏トモ話ス。学校デ河上〈丈太郎〉氏ト談シテ一時過家ニ帰ル、夕刻松本〈益吉〉氏来訪。(後略)

十二月十日 水 晴 (前略) 四時間ガスンダ所ニ下位ノ講演ノコトデ学生ニ逢ヒ、〈C・J・L・〉ベーツ氏ガ〈中央〉講堂ヲ貸サスト云ウタト云フノデ、急ニ松本〈益吉〉ニ逢フ必要ガ起リ、方々尋ネ廻リ昼飯ガ晩クナッテ餅ヲ食ベ牛乳ヲ飲ンデ出ル。夜八時カラ〈H・F・〉ウヅ〈ウオース〉

氏ノ所デ相談会ガアリ十一時半ニカヘル。集ルモノ(C・J・L・)ベーツ、松本(益吉)、河上(丈太郎)、岸波(常蔵)。

十二月十一日 木 曇霰 睡眠不足声出デズ、三年哲学ヲ休ム。ゴタ／＼ノ件落着感謝ノ他ナシ。(後略)

十二月十二日 金 半晴雪、昨夜九時間寝テ氣持ヨシ、今夜英語雄弁大会ガ有ツタガ行カス。

十二月十七日 水 曇 神学部華嚴ヲ了ル。(後略)

十二月十八日 木 晴 (前略) 夜七時カラ文科教員一同ヨバレル、クリスマスデヤゲナ。(F・)ヒリアドガ下手ナ奏楽ヲ長タトヤリ其カラ欧州戦争ヘ出タ話ヲ永タトヤル。彼等ノ戦争ト云フモノハ要スルニ陣ヲ掘テ置イテ、攻メルノハ口ヤ金錢デアルノデヤ、十一時ニ寝ル。(後略)

十二月十九日 金 晴 午後一時半カラ擬国会ヲヤル。往カズ。(後略)

十二月二十二日 月 晴曇 朝急ニ頼マレテ(H・F・)ウヅ(ウオース)氏ノ代リニチャペルノ話ヲスル。真理ニ欺カレナト云フコトヲ話ス、(中略) 夜教会ノクリスマス、(村上) 醇造ト(村上) 楨三往ク。

十二月二十三日 火 晴 授業今日デ終ル。午後三時カラ職員全体(C・J・L・)ベーツ氏ニ招カレ食堂デ菓子三キレ、レモン・チー、コーヒー、畑(歛三)サンノ世界

教育大会ノ話、小寺(敬二)氏ノ欧州ヲゴロツイタ談ガアル。

十二月二十八日 日 晴 礼拝柳原(正義)、今年モ容シタマヘト云フ意味ノ分ラヌ題。言フコトバハーツモ分ランダ。(後略)

大正十四年

一月一日 木 晴 世間ハ節約ノ新年ト云ウテ贅ヲソスル奴ハヤハリスルラシイガ、私ニハ喪中ノ新年、平日通りニシテ休暇ダケヲ貰ツテ居ルノデ却テ調子ガヨイ、(中略) 拝賀ニハ出ズ、曾木(銀次郎)サンノ祈祷ガ長カッタ、頭ヲ下ゲテ国民道德第一章カラ講ジテ居ッタト云フ噂ヲ聞イタ。(後略)

一月八日 木 晴 学校始マル。礼拝ノ司会スル。(C・J・L・)ベーツ氏談。二年ヲ三時間ニ繰上ゲ。(後略)

一月九日 金 曇雨 (H・F・)ウヅ(ウオース)氏チャペルデ話ス。一年ノ某新人ノ購読者ヲ募ル。今ハ以前ノヤウニセンチメンタルノ基督教ヲ説クノデナイト、神ハ民衆ト共ニ在ストカ、新年号ノ一部分ヲ読ンデ其デヤカラ買ヘト云フ。今ノ(H・F・)ウヅ(ウオース)サンノヤウナ話デハナイカラ買ヘト云フコトニナルガ、其□マデハ氣ガツクマイ。(後略)

一月十一日 日 曇 〈関西学院〉教会柳原〈正義〉ノ説教。(後略)

一月十二日 月 晴 東氏ヨリ台中校へ一人欲シイト言ウテ来ル。四年級ノモノニ話スト午後北島〈俊郎〉ガ行キタイト云ウテ来タ。チャペルデ話ス。(神ニシテ人タル基督)

一月十三日 火 晴 (前略) 北島〈俊郎〉ノ成績ヲ東氏ニ渡シ同人面会ノコトヲ定メル。(後略)

一月十四日 水 曇半晴 一年B二時限ニ繰上ゲテクレヨト頼ンデ来タノデ往ク。神学部ハ社会講演トカノ見学ニ大阪ヘ往ツタトカニテ休ミ。(後略)

一月十五日 木 晴曇 午後三時カラ教授会、出席シタガ齒痛ニ堪ヘラレズ中途カラ帰ル。(後略)

一月十六日 金 晴曇 齒等ノ痛ハ止マツテ居ルガ今日ハ如何ト藥ヲ用意シテ往ク、其方ハ起ラズ、声ガ出ヌヤウニナツタ。〈中央〉講堂ハ(H・P・)ジョンズ氏。(後略)

一月十九日 月 半曇 午後雪ガ交ル。川上サンガ休ヂヤカラチャペルデ話セヨト云ハレテ飛ンデ往ツテ話ス(打破気分)。午後一年ヲ四時間ニ繰上ゲル。(後略)

一月二十日 火 〈中央〉講堂デ松本〈益吉〉氏ガ話ス。人間ハ進歩ノ性ハアルガ理性ニ随フコトハ是トシタコトヲ遂行スル意志ノ力ヲ養ハネバナラント云フタノハ、ソレデ

ヨイガ日本人ハ真理ニ従ハヌ国民デアル、虚言ヲ恥ヂザル国民デアルト例ノ脱線ヲヤッタノハヨクナイ。是ハ暢齊先生ノ口ヲ以テ叱ラセルカラ茲ニハ書カヌ。(暢齊先生ハ計畫中ノ隨筆「暢齊先生支那旅行」ナリ)

一月二十二日 木 半曇 コロンビア大学ノモリア教授ガ資本主義ノ道德ト云フ題ニテ頼ナイ話ヲスル、ツマリ簡人的資本主義ハ自由ト正義ト自己利益ヲ要求スル。前ノ二ハ差支ナイガ最後ノ利己ト云フコトハ種々ナ弊害ヲ生ズルト云フノデアッタ。中途カラ帰ル、三時間休ニナル。(後略)

一月二十三日 金 半曇 吉岡〈美国〉サント話シテ居テチャペルニ出ズ。一時間ヌケルカラ帰ツテ用事ヲスマス。岸波〈常蔵〉サンニ聞クト今日ノ話(ワード教授ノ注昨日モリアトアルハワードノ誤リカー)ハ社会主義ノ道德的価値ト云フ題デ社会主義ハ互助精神ガアルカラ、資本主義ヨリ道德的デヤト云フニアツタゲナ。(後略)

一月二十四日 土 曇 ワード教授ノ話ガアツテ三時限ハ駄目ニナルカラ、二時限ヲ終ツテ帰ツテ来ル。其カラ総務部ト銀行ヘ往ツテ来ル。右ノ顎ガ痛ミカケルノデ午後ハ全ク休養スル。(後略)

一月二十五日 日 曇 礼拝柳原〈正義〉氏説教。(後略)
一月二十六日 月 曇 (前略) 夜六時カラ中央デワー

ド教授ノ歓迎会、一円出シテ鋤焼ヲタベテカヘル。(C・J・

L・) ベーツ氏ガ岡田(良平)文相ニ会ウタ話ヲスル。吉

崎(彦一)氏ガ厭味ノアル笑方ヲシテ聞ク。松本(益吉)

氏歓迎ノ辞ヲ述ベテ讀メ過ギルト見セタガ排日問題ヲ調査

シテ差引ク、ワードノ答辞ニ米國ノ軍事教育ノコトモアッ

タノハ(C・J・L・) ベーツノ依頼ニヨッタノデアル。

一月三十日 金 曇 朝起キルト雪ガ珍ラシクモ銀世界

ヲ現ジテ居ル。齒ガ痛ンデ二時間目少シ後レル。吉岡(美国)

サンチャペルノ番ナノニズボラ遊バサレテ痛ム齒抱ヘナガ

ラ話ヲスル、(H・F・) ウヅ(ウォース)氏ハ東京ニ往ッ

タ。午後二年ハ休ンダ。食事ヲスレバ授業不可能ナルト思

ウタカラダ。(後略)

二月一日 日 曇 礼拝柳原(正義)ノ説教、(後略)

二月三日 火 晴半、声デズ。(中略) 夕刻松本(益吉)

氏来リ師範生無試(験)入学ノコトニツキ相談。(後略)

二月五日 木 曇 チャペル聯合デ(W・) エリオット

博士ノ話ガアルト云フノデ往テ見ル。ヨク喋舌ツタガ何ノ

感動ヲ与ヘナカッタと思フ。

二月八日 日 晴 (関西学院)教会松本(益吉)氏。(後

略)

二月九日 月 夕刻曇夜雨 (H・F・) ウヅ(ウォース)

氏不在ニツキ司会ヲスル、吉岡(美国)氏讀美歌ノ講義ガ
アル。(後略)

二月十日 火 晴 声出デズ、困ル。四時間目ヲ中止シ

テ帰ル、(中略) 夜五時半カラ中央講堂ニ学生会委員ノ送

別歓迎会アリテ行ク。(後略)

二月十二日 木 半晴 道悪シ。声出デズ。身体モ非常

ニ悪イノデ午後ノ課ヲ休ム。(後略)

二月十三日 金 晴 声ハ出ヌガ試ニ登校スル。然シ何

如カス力済シテカヘル。(後略)

二月十八日 水 曇 比較宗教ノ課了ル、午後一年B眼

鏡ヲ忘レテ大ニ困ル。(後略)

二月十九日 木 曇 中学部ニ行キ漢文教師ノコトヲ探

ス。田中ニ逢ヒ殿岡ノコトヲ聞キ問合せ等ヲスマセル。東

洋思想史今日ヨリ休ム。

二月二十一日 土 晴 正午寶亭ニテ謝恩会。一事ヲ守

レト云フコト、基督教ヲ忘レザルヤウ話ス。(後略)

二月二十二日 日 晴 (関西学院)教会へ行カズ。午

後学生某、夜学校ノコトヲ聞キ二来ル。(後略)

二月二十三日 月 曇小雨 新宮商業学校々長関谷ト云

フ人来リシタメ午前ノ時間潰サル。午後教師会議アリ、馬

鹿ナ問題バカリ、教務ヲ辞スルト云ウタ。朝カラノ面倒ツヅ

キ昂奮シテ夜寝ラレズ。麻生ニ逢フ。

二月二十四日 火 半晴 朝再ビ(H・F・)ウヅ(ウオー
ス)氏ニ教務辞任ノコトヲ告ゲタ。畠中氏ノ話ガアッテ二
年ノ業潰レル。(後略)

二月二十五日 水 曇 一年ノ課業ヲ三時間ニ引上ゲテ
クレヨト云ウテ来タノデ行ク。畠中氏ノ話ヲ一寸聞ク、聲
ガ大キカッタ。(後略)

二月二十八日 土 晴 (前略)二時間カラ卒業生送別
会、スキ焼。(後略)

三月一日 日 晴 卒業礼拝午後二時ヨリ、音楽礼拝
ニツギ説教ハ波多野傳四郎氏。伝道局長タケニ頻リニ総ノ
持物ヲ献ゲヨト叫ブガ結局要領ヲ得ズ。(後略)

三月二日 月 晴 (前略)早く登校シテ見タガ督学官
モ来ズ要事ハナカッタ。礼拝ノ番ニ充テ、アツタガ声ガ出
ヌノデ河上(丈太郎)サンニヤツテ貰フ。尤モ先生ハ自分
ノ番ヲ思ウテ準備シテ居ラレタノデ丁度ヨカッタ。(後略)

三月三日 火 晴 午後衛生院ニ金氏ヲ見舞フ。談話ス
ナ、只一寸逢ヘト医者ノ言ヘルニヨリ久シク留ラズ、(中略)
金サン鶏卵二十(一、六〇)買ウテ行テアゲタ、其後問題
ヲ書ク。運動ニ出カケナンダ。

三月五日 木 曇 赤羽横ト云フ文部省普通学務局属官

ガ来テ午前中忙シカッタ、午後モ種々ノ要事ガアツタ。

三月六日 金 半晴、赤羽(横)氏今日午前中ヤツテ来
タノデ忙シ。午後三時ヨリ教師会議、英文科(伏字)落第。

三月七日 土 晴 九時ヨリ卒業式。⁽¹⁴⁾讚美ノ後吉崎(彦

一)氏ノ聖書朗読ト脱線シタ祈禱、吉岡(美国)サンノ勅語、
君ガ代、証書授与、賞品授与、百円ノ特別賞ガアツタ、(C・
J・L・)ベーツ告示、時代ヲ先導スルモノトナレ、ソレ
ニハ先見ノ明、勇氣、自治ノ材能ガイルト云ウタノハ先ツ
可イトシテ置ク。次ニ前朝鮮政務總監有吉忠一氏ノ欧州ニ
於ル人種問題研究ノ趨勢ヲ論ジテ、我国青年ノ覚悟ニ及ブ
ト云フ題ノ話、其次ニ平塚知事ノ祝辞モ丁度同ジコトガ云
ウテアツタ。同窓会代表柴田(享一)、生徒代表ノ祝辞ニ
次デ各部ノ答詞、頌歌、祈禱。帰路金、後ニ寺師ガ物問ヒ
ニ来ル。(中略)夜同窓会、嵩(龍純)ト塩見(恒明)両氏、
他ハ河上(丈太郎)サン、松本(益吉)サン、(H・F・)
ウヅ(ウォース)氏、(F・)ヒリ(ヤード)氏氏、(H・
P・)ジョンス氏、ソレニ(村上)謙介ト予ノミ、岸波(常
蔵)サンモ居ラレタ。

三月八日 日 半晴 礼拝柳原(正義)氏ノ談。(後略)

三月九日 月 晴 暖ナ春日デアル。試験ハ明日カラ、
(中略)午前(伏字)ガ兄種吉氏ニ連レラレテ頼ミニ来タ。

勿論如何トモスルコトハ出来シガ氣ノ毒ノコトデアル。

三月十日 火 晴曇 試験始マル。午前十一時二帰ル。

(後略)

三月十一日 水 半晴 時々小雨、朝ハ素敵ナ旋風ガ突然ト起ツテ程ナク止シダガ方々損害多シ。堺ノ格納庫倒レテ飛行機全滅。午前立ツベケハ苦痛。午後採点、散歩セズ

三月十二日 木 晴 午前中立ツベケ。二年^(伏字)ガカンニングヲシテ(H・F・)ウツウォースニ見付ケラレ、其結果午後一時半カラ教師會議、此学期試験ノ点数ハ全部無効トスルコトニ決シタ。(後略)

三月十三日 金 半晴 朝(C・J・L・)ベーツ氏ノ代ガアツテ午前中立番ガツヅク。一年生一同ヨリトシテ学生ニ姦アリトシ監督ノ厳ヲ要求シテ来タ。河上(丈太郎)サンヘ其手紙ヲ渡ス。午後湯カラ帰ツテ居ルトキ訪ネテ来テモラフ。宅ヘ持テ往テ奥様ニ渡シタノヂヤ。外出セズ、答案ヲ見ルニ忙シイ。(後略)

三月十四日 土 曇 午前中立番。氣ガ遠クナル。一年B^(伏字)ガ^(伏字)ニ教ヘルト見タカラ前ノ方ニ引出ス。(後略)

三月十五日 日 曇小雨 答案審査ニタ、ラレテ外出セズ。(後略)

三月十六日 月 半晴 十時五分マデ立役、午後採点スル。

三月十七日 火 晴 試験スム、(中略)夜中村精一ガ予ガ其答案ヲ一枚別ニシテ帰ツタト、中村栄一ガ告ゲタトノデ、何ウシタノカト問ヒニ来ル。非常ノ^(伏字)デアッタノハ無理ハナイ。所ガ予ガ別ニシテ戻ッタノハ彼ノデハナイ。哲学科ニ属スル二人ノデアツタカラ、返ルトキニハ又大ニ悦ンデカヘル。夜マデカ、ツテ採点ヲスマス。

三月十八日 水 晴 午前学校ヘ行キテカヘル。中学部成績発表。(村上)醇造進級ス。

三月十九日 木 晴 午前銀行ニ行キテカヘル。午後成績ノ計算ニ往キ帰ルト頭痛シ、竟ニ何モ為スシテ寝ル、(中略)中学部入学試験、受験者一、四〇一。

三月二十日 金 晴 朝九時カラ教授會議ガ始マリ、親子ドンブリヨバレテタ刻帰ツテ来ル。今年ハ落第者ガ少カッタ。

三月二十三日 月 曇 入学試験問題ヲ斉藤(廣)ニ神学試験点数ヲ吉崎(彦一)ニ渡シテカヘル、(後略)

三月二十七日 火^マ 曇小雨 (前略)学校ヘ往ツテ岡本三郎ト澤田ノコトヲ取調べテ返事ヲ出シ、阿比留モ英文科ヘ廻スコトニスル、梶川亮吉ト其兄寅次郎ト云フ人尋ネテ

来ル。(後略)

三月二十九日 日 雨 山本近夫、芦名克己ト云フ二人願書ヲ大阪カラモテ来テ明日明後日ハ来ラレンカラ預ツテオイテクレト云フ、預ル。礼拝松本〈益吉〉氏、後レテ終ノ辺ヲ少シダケ聞ク、神戸市基督教々化運動ト書イタ紙ヲクレル。讀ンデ見ルト宗教ハナイ。何ノ故ニ基督教ニ悔改メバナラヌカ、不明ニナル。煩悶ガアルカラト云フカ、彼等ハ決シテ用務以上ノ煩悶ハナイト云フデアラウ。社会的不安ガアルカラト云フカ、彼等ハ其ハ基督教デハナイ、第三インターナショナル⁽⁵⁾ニヨツテ払ワレルト云フデアラウ、罪ヲ忘レテ教会ハ〇ニナル。是デハ市ノ教化ハ出来ヌ。外出不能。(後略)

三月三十日 日 驟雨 朝学校ニ往キ山本〈近夫〉、芦名〈克己〉二人ノ願書ヲ渡ス、松本君尋ネテ来テ種々ノコトヲ頼ム。是カラウルサイ、中学部ノ補欠ヲ取ル日デ往テ見タラ百人入ルトコロヘニ二百人余発表シテアツタ。後ニ聞テ見ルト其デモマダ足ランノデ明日ニ次発表ヲアルゲナ。

(後略)

四月五日 日 曇雪 礼拝千葉勇五郎氏、信仰ノ友ハ階級ニ反対シ民衆のニナルノヂヤゲナ。(後略)

四月六日 月 晴 試験始ル。(後略)

四月七日 火 曇 試験ツヅキ、午後人物試験ヲシテ日暮マデカ、ル。(後略)

四月八日 水 雨 成績シラベ、午後阪急湯ニ行ク。夜〈村上〉謙介手伝ニ来タガモウ洛ンデ居タ。三宅利平、西岡安左衛門等三宅ノ子ノ入学ニツキ頼ニ来ル。入レテ居タ。(後略)

四月九日 木 曇 午前一寸出テ河上〈丈太郎〉、岸波〈常蔵〉、大藤〈豊〉氏ト成績ニツイテ会議、後二時ヨリ教授会。□^(依モ)□ノ再試験ニツキ其学科ノ教師全体ノ提議デ教授会ガ満場一致ニテ決シタルモノハ再試験ニ付スルコトヲ得ト云フ新規定ガ生レタ。

四月十日 金 晴 成績発表、謄写版到着。夜元町日之出ニテ池田〈多助〉⁽¹⁶⁾氏送別会、往路電車デ河上〈丈太郎〉、大藤〈豊〉両氏ト一緒ニナル。会ハ盛会、松本〈益吉〉、西山〈廣栄〉、河上〈丈太郎〉、柴田〈享二〉、〈村上〉謙介、小寺〈敬二〉何レモ各方面ヲ代表シテ送別ノ辞ヲ述べル。其前木村ノ開会ノ辞モアツタ。〈村上〉謙介ノ談ノ外ハ皆意味ノナイ駄弁、其代リ〈村上〉謙介ノハ弊ヲ穿ツテ池田〈多助〉デモ誰デモノ肝ヲ刮ル。ソレデ聞ク奴ガ鄙劣無操ノ人デアレバ腹ヲ立テルコトガアル、小寺〈敬二〉ノ談ノ最中九時半ニナツタカラ返ル。(西山〈廣栄〉ノ談

ノ中ニ池田(多助)ト衝突スルノニ氣兼シテ幹部ガ彼ヲ叱ツ
タト云フ話ハ注意シテ置クベキコト)

四月十一日 土 曇雨 朝消費組合へ往テ紙ヲ買ウテ来
ル。午後(村上)植三(村上)醇造モ交ッテ印刷ヲヤル。(後略)

四月十三日 月 晴 九時ヨリ始業式、祈祷ヲ頼マレ、
声出ズナッテ短クスマス。岸波(常蔵)サン聖書、松本(益
吉)サンノ話。

四月十四日 火 晴 (前略) 十二時頃大阪西野田職工
学校長原田某ト云フ人来ル、教師ヲ買ヒニ。商科神崎(驥
一)氏ニ引渡シテカヘル。

四月十五日 水 晴 午後一時ヨリ入学式。教室ノ都合
ガツクノト十二名欠席者ガ有ツタノデ補欠ハ皆入レラレル
コトニナツタ。感冒ノ氣ガアルノデ湯ヲ見合ハス。

四月十六日 木 晴後曇 池田(多助)氏箱根丸ニテ欧
州へ向ケ出発。送ル積リデ三年ノ思想史ヲ休ンダガ、他ニ
差支ガ出来テ往カレナシ。山路来タカラ口頭試験ヲヤル。
英語ハ(H・P・)ジョンズ氏ニ頼ム。正午理事会員ト共
ニ食スルヤウ招カレテ往ツタトコロ、二十年勤続ノ記念品
トシテ花瓶ヲ二個モラフ。其代リニ一寸話ヲサセラレタ。

四月十八日 土 晴 今日モ困シカッタ、(中略) 神学
部ハ歓迎旅行トカデ休ミ。大二助ツタ。

四月二十日 月 晴 午後一時カラ一円ト五十錢デ見セ
ル庭球試合ヲ許可シタ人間ガアル。而シテ商科ハ午後休
ヂヤゲナ。文科ハソシナ馬鹿ナマネハ為ンコトニシテアッ
タガ先生方ガ勝手ニ休ンデ生徒ハ手ブラデ返ツタト云フコ
ト。

四月二十四日 金 晴 午後ノ二年ヲ四時ニ繰上ゲタ、
今日モ困シイ日デアッタ。(後略)

四月二十五日 土 晴夜雨 午後総務部ヤ銀行ヤ二行キ
テ帰ル、(中略) 夜婦人会ノ卒業会、(村上)醇造ノホカ皆
往ク。(後略)

四月二十六日 日 曇小雨 身体悪シク嫌ナ日、礼拝ハ
柳原ハ正義、祈ノ力ト云フ題。(後略)

四月二十八日 火 雨 プリントノ二回目ヲ携ッテ行キ
芝野(秀夫)氏ニ預ケル、三年ノハ青木、児玉ニ渡シテ配
布シテモラウタ。三年ノプリント代(角、高崎二人ヲ除ク)
受取ル。午後帰ッテ湯ニ行キ、帰ッテカラ倒レ込ンデ寝ル。
熱モ七、五アッタ。

五月一日 金 晴 (前略) 一年ABカラプリントノ集ッ
タ金ヲ受取ル。(後略)

五月三日 日 雨 脚ダルク歩行ガ困難デアッタ、メ教
会へ出ズ。三戸吉太郎氏昨夜十一時永眠ノ由、予ハ往カレ

ズ、〈村上〉八重ガ松本〈益吉〉サンナド、一緒ニ往クツモリデ下駄買ウテ待テ居タガアチラノ都合デ止ニナル。(後略)

五月四日 月 晴 午後ノ三年ヲ二時間ニ繰上ゲル。午後三戸〈吉太郎〉ノ葬式、〈村上〉八重ト〈村上〉謙介ニ往ツテ貰フ。(後略)

五月十日 日 晴 天皇陛下銀婚御式、十時ヨリ学校デ祝賀会ガアル。往カレズ。(後略)

五月十二日 火 晴 朝神学ノ講義少シ楽ニ出来ル。(後略)

五月十三日 水 晴 朝電気湯ニ入ル。其ガタメカ腹部ノコリ等ハ和ギ氣持宜カリシニ非常ニ逆上、口内鼻腔充血シテ話ニ困^{くる}シム。オマケニチャペルノ用事ガ当ツタ。健康デナケレバйкаヌコトカラ、精神ノ健康ヲ話ス。(後略)

五月十六日 土 晴 久シ振リニ合同礼拝ヘ出タ。河上〈丈太郎〉サンガ社会学ノキリストヲ油ガ乗ツテ話シテ居タ。花ノ裡面ヲ指示スルトキ表面ノ美ハ多クノ人ニ注意サレヌデアラウ。四時間目声苦シカッタ。十二時半カラ哲学会ノ歓迎会ヘ来テクレト云ウテ右往左往、其場所ヲ捜シタガ其中ニ苦シクナッタカラ帰ツタ。(後略)

五月十七日 日 雨曇 礼拝〈C・J・L・ン〉ベーツ説

教、基督教ハ社会改良バカリデナイ、永生ヲ与ヘニ来ラレタノハキリストデアル。神秘的ノ宗教方面ガナケレバナラヌト云フタノハ珍ラシイ話デモナイガ時弊ヲ衝イテ居ル故ニ大ニ可。(後略)

五月十九日 火 晴 肩凝ル。夜六時ヨリ明海〈ビル〉ニ於テ〈C・J・L・ン〉ベーツ氏送別会。〈村上〉謙介ト一緒ニ行ク。蝦蟆ヲ食フ。皆始メテラシイ、後デ胸ヲ悪ガツテ居ルモノモアツタ。仏人ハ之ヲ食フト云ウテ喜ンデ食フモノモアツタ。仏人ガ食ベレバ蝦蟆デモ食フ。日本人ガ食ベルガ章魚ヲ食フカ。帰ツテ寝タノハ何時デアツタカ知ラシ。

五月二十日 水 晴 夜中ニ目ガ醒メテ久シク寢ズ。暁ニナツテ眠ル。湯ヘ往カズ。コリハ輕シ。礼拝ガ合同デ〈C・J・L・ン〉ベーツ院長ノ別レノ挨拶。午後四時第一突堤カラエンブレスオブカナダニ乗込ム。トテモ歩ケンノデ往カズ。(後略)

五月二十二日 金 晴 今日ハ非常ニ弱ル。斉藤カラ一円紙幣ヲ貰ウテ袂ニ入レタガ帰ツテ見ルト何処ニモナイ。途中デ遺シタト見エル、(中略)夜献身デ金儲スル活動ガアツテ〈村上〉醇造行ク。

五月二十三日 土 曇 朝飯ガ遅レ一ゼン食ベテ牛乳ヲ

飲ンデ出ル。一時間ヲスマシテ帰ッタガ食物ハナカラウカラ、今度ハタメシニ妙布ヲ頭ニモ張りメンソヲ塗リテ出ル。(中略) チャペルヘ出ルトヘS・H・ウエンライトガ話シテ居タ。珍ラシヤ。三時間目法相宗ノ五位百法ノ話ヲシテ居ルト大キナ地震ガ揺ッタ。ケレドモ時間マデ講義ヲツヅケテ出テ見ルト飛出シタ教師ヤ生徒ハ多カッタラシイ。(後略)

五月二十四日 日 晴 頭悪シ。学校ヘ行ク。柳原(正義)説教。(後略)

五月二十五日 (月) 晴 湯ガ休ミ。一時間目ノ半分マデハ声ヨク出タガ、二時間目ハ困ル。チャペルヘ一寸出タガ又引返シテ帰ル。朝次亜燐ヲ忘レタ。四時間目モ困ッタ。午後農工(銀行)ヘ行キ、帰りニ暫ク待ツテ(S・H・ウエンライトノ話ヲ聞ク。基督教ニ関スル或誤解トカ云フ題デアッタガ、セルソスノ批評ノオリヂンノ弁解ノアルモノヲ話シタノデアッタ。先生ヤ、老衰シタカ。(後略)

五月二十七日 水 晴 二時間声ガ出ヌニ困ル。五時間目モ。(後略)

五月二十八日 木 晴 夕刻松本(益吉)サン来ル。土曜日(S・H・ウエンライトト会食ノコトヲ話シニ、コレデ二度目ヂヤ。昨夜眠ラナンダ、メ声出ズ。午後二年ヲ

出席ダケトツテ帰ル。(後略)

五月二十九日 金 晴 (前略) 今日ハ試ニ三ツ輪解熱ヲ服ンダ、メカ頭ノ工合ガ甚ダヨイ、(中略) 一年ニブリント渡ス。

五月三十日 土 晴 中央食堂デ十二時半カラ(S・H・ウエンライト氏ト会食スル。(H・F・ウヅ「ウオース」、曾木(銀次郎)、柳原(正義)、松本(益吉)、真鍋(由郎)、内村(順也)、(W・K・マシウス、藤井(秀樹)氏ガ集ル。スキ焼デ一円出シ。(後略)

五月三十一日 日 晴 朝弁天ノ瀧ニ行ク。数人ノ生徒ニ行逢ウタ、水少ク頭カラ打タセテモ冷水摩擦スル位ノ感ナリ、(中略) 大石ノ教会ヘ往ツテ見ウ、(中略) 神学生ガ作文ヲ読ムヤウナ咄ヲシテ居リ、西行ヲソシリ、ゲーテヲホメ、テニスヲ讃メタリ、何カノ管ヲス雑誌カラデモ得タラシイ、是デ基督教ガ盛ニナレバ奇蹟ヂヤ。(後略)

六月一日 月 曇 朝一年ヲ終ツテ帰り湯ニ往キ、二年ト午後ノ三年ヲスマス、(中略) (村上)謙介(村上)醇造ハ蓮池(注実ハ妙法寺川尻ナリキ)ニ飛行機見ニ往ツタ。

六月三日 水 晴 脚立タズ、時間少シ後ル。午後ハ又発声ニ支障ヲ来ス。三時カラ教授会アリ。哲学部ノコトダケスンデ退出シ、(後略)

六月四日 木 晴 歩行ムツカシ、学校ヲ休ム。序ニ今週中休ンデ休養ヲシテミルコトニスル。(後略)

六月九日 火 晴 神学校ノ一時間ヲ済マシテ帰り湯ニ往ク、(中略)午後三時カラ松本ノ葬式(注英子嬢ノ)デ往ク。家族ハ涙ノ葬式ガ笑フヤウナ花ヤカサデ済マサレタ。斯イフコトニハ常識ガイル。ト云フトヨクシヤベル彼等ハ我々ハ死者ガ確ニ天国ヘ往ツタト信ジルカラ葬式ニ於テ寧口笑フ。仏教徒ノヤウニ悲マスト云フデアラウ。ソレデ言訳ガタツト思フノハ彼等自ラノ心デ、一般ニハ何ノ同情ヲモ受ケルコトガ出来ヌデアラウ。

六月十日 水 晴 地塩会⁽¹⁸⁾デ河辺ノ歡迎会、中央講堂デ親睦会ガアツタガ往カナンダ。此頃温度ハ八十度ニ上ル。

六月十四日 日 曇雨 花ノ日。真鍋(由郎)サンノ話ガアツタ。種々ノ歌モアル。神ヲ讚美スルノカ。人ニ聞カセタル為ニ歌ウテ居ルノカ知ランガ、結果ハ何方デモ神ノ栄光ノ顯ル、コト、ナルノデ讚美ヂヤ。午後湯ニ往カナンダ。

六月十五日 月 雨霄 三年二時限ニ繰上ゲトナル。何レモ声割合ニヨク出テ愉快ニ感ジタ、(中略) 窠文堂ニ振替貯金デ謝氏中国哲学史ト梁氏清時代學術概論ヲ注文スル。(後略)

六月十六日 火 晴 神学(部) 五年ノ教室デ学生ヲ叱リツケル。学生デハナイ、現在ノ教会ヲ叱ツタノヂヤ、(中略) 中学部ト(神戸)ニ中ハ野球ヲヤツテ居タノデ四回ヘンマデ見ル。同ジヤウナ下手同士。(後略)

六月十八日 木 晴 苦シナガラ學課ヲ済マセル。(中略) 学校ニ於テ人々殊ニ西洋人等ガ予ヲ見ル眼ガ変デアアル。神学生ヲ叱ツタノガタ、ツテ狂人ト思フノデアラウ。

六月十九日 金 曇雨 昂奮ガ強イノデ休マウカト思ウタガ強テ出テ午前ダケヲ済マス。小使ノ奴マデ予ガ困ムノヲ興味アルコト、思ウテ教室ノ戸口ニヤツテ来テ窃ニ聴イテ又那方ヘ行テハ人々ト大噂ヲシテ変ナ顔ヲ見テ予ヲ見ル。小使ガ教室ヘ行ツテ生徒ト大話ヲシタリスル。是ニモ文學部ノ不取締ト云フコトハ分ル。

六月二十日 土 雨 神学生ニ叱ツタ理由ヲ一寸バカリ説明シテヤル。小使今日ハ草履モ取ツテクレン。石本生カラ墓碑ノコトヲ頼マレル。午後腰痛ミ雨降ルノデ湯ニモ往カズ。午睡シテ夜モ早く寝ル。(後略)

六月二十一日 日 曇 (関西学院) 教会柳原(正義)氏ノ説教、今日ハ特ニヨク聴イテミタガ、少シモ人ノ臟腑ニ入ルヤウナ言ハナイ。空論デアアル。聞クモノモ空ニ聞クカラ事ハ済ムガ、是デハ基督教ハ盛ニナラス。(後略)

六月二十三日 火 晴 比較宗教ノ講義ガナイデ（前回
デ打切ル）学校ニ出ヌ。（後略）

六月二十五日 木 曇小雨 竹中ト池田トニ見舞ノ札ヲ
出ス、石本カラ頼マレタ碑文ヲ書イテ送ル。哲学科ハ臨
時休ニスル。午後二年傘ナシ杖ナシデ行キシタメカ声出ズ、
困ル。（後略）

六月二十六日 金 曇 傘サシテニ時限カラ登校、礼拝
ヲスマシ、金受取りニ銀行マデ行キ返ツテ四時限ノ授業ヲ
ヤリ、サントキツチヲ食シ、五時限ヲ終ツテ帰ル。今朝カ
ラポルトワインヲ吞ム、身体碎ケタヤウナ、熱七度二分ア
ル。（後略）

六月二十七日 土 雨 朝神〈学部〉一年ニ桐壺ヲ講ジ
テ帰り、横ニナツテ居ルト其仮眠ル。醒メテ文科ヘ行キ、
二年ニ帯木ヲスマシテカヘル。熱ガアルノデカ倦ルクテ堪
ヘラレス、床ニ入りテ、又日暮マデネル。（後略）

六月二十八日 日 曇 〈関西学院〉教会ノ説教松本〈益
吉〉氏。（後略）

六月二十九日 月 曇 チャペルノ番デ呻ツテ居タトコ
口岸波〈常蔵〉サンガ代ツテクレラレタ、今日デ課業ガス
ム、夜ブレザントンホテルト云フ所デヨバレガアツタガ天
氣ガ怪シイノデ欠ト書イテ置イタ。（後略）

六月三十日 火 午後曇 文学部本日済ム、系図綜覧
ヲ〈H・F・〉ウヅ〈ウオース〉氏ニ渡シ金ヲ送ツテ貰フ
〔芝野〈秀夫〉サンニ〕。東京行コトハル。午後青谷温泉ニ
行キ帰ツテカラ中学部ト甲陽〈中学〉ノ野球ヲ見ル、八回
ウラカラ十回ガ済ムマデドチラモ入ラナンダ、二対二デ中
止トナル。（後略）

七月二日 木 晴 漢読ノ資料ヲ集メテ日ヲ暮ス。（後
略）

七月十三日 月 晴 〈前略〉夜中学部同窓会（明海〈ビ
ル〉）（中略）〈村上〉謙介行ク。

七月十九日 日 晴 〈関西学院〉教会ニ出ル、今日ハ
体ノ工合甚ダ悪シ。脛縮マツテ歩行困難ナリ。松本〈益吉〉
ノ説教要領ヲ得ズ。（後略）

七月二十六日 日 晴 〈関西学院〉教会真鍋〈由郎〉
サンノ説教。（後略）

八月二日 日 晴、礼拝柳原〈正義〉詰ラン話ヲシテ居
タ。〈関西学院〉教会ガ常ニ斯ンナ低級ナ思想バカリ説教
スレバ頭ノアル奴ハ自然ト寄リツカズ、低能ノモノドモガ
ソレニ教ヘラレツ、凡人トナルノデハ大二覺束ナイヤウナ
氣モスル。（後略）

八月二十六日 水 晴 〈前略〉大塩彦治郎氏イリノイ

ス州アーバナ市ヨリ手紙ヲ送り米国ニテ関西学院八年々認
メラレズナルト云ウタ。

八月三十日 日 晴 〈関西学院〉教会柳原〈正義〉説教、
復讐心嫉妬心ヲ除ケハ小□ヂヤガ現在ノ教會員等ヲ戒メル
タメナラバ可シ。(後略)

九月五日 土 半晴 (前略) 中学部今日ヨリ始マル。

九月六日 日 半晴 礼拝松本〈益吉〉氏、其後瘦セタ
青年ノ洗礼式ガアル。此青年ハ旧教トカノ洗礼ヲ受ケテ居
ルトモ云フ。其ナラバ洗礼ハ不用デアラウ。(後略)

九月九日 木 晴 柴野〈秀夫〉氏式ハ十時カラ授業ハ
ナイト明日ノコトヲ言ウテ来ル。商科カラ然イウテ来タデ
同ジヤウニセウト聞イテ見タラ、〈H・F・〉ウヅ〈ウオー
ス〉サンガ云ウタト云フノデアル。(後略)

九月十日 金 曇 学校始マル。十時カラ始業式。生徒
モ来ルモノハ朝カラ来テ待ツテ居リ、来シモノモ多カッタ。
先生モ半分以上来ヌ。〈H・F・〉ウヅ〈ウオース〉ノ講
話ニ万事調和ヲ商科トノ間ニハカラネバナランゲナ。ス
マートト云フ語ハ非常ニ嫌ヒヂヤ。向上ト前進ノ理想ノ下
ニ生ネバナラントモ云ウタ。西洋人カラソレヲ聞イタコト
ヲヨロコブ。是迄俺ガ何辺モ彼等ノ前デ其事ヲ云ウテ、西
洋人ガスマートヲ以テ人ヲハカル標準トシテアルノヲ罵ツ

タコトガアルガ、其時ハ誰モ何トモ云ハナシ。(後略)

九月十一日 金 晴 (前略) 課業ハ随分エラカッタ。
パンノ弁当ヲモツテ行キ帰路朝日デ三ツワ祛痰剤ヲ買ウテ
来ル。(後略)

九月十二日 土 晴 合同礼拝ニ神崎〈驥二〉サン見テ
来タウソヲ談シタ筈ヂヤガ往カナンダ。今日モ課業ハ苦シ
カッタ。(後略)

九月十三日 日 晴 柳原〈正義〉ノ説教。何デアッタ
カ忘レタ。(後略)

九月十四日 月 晴 学校デチャベルノ話モシタ(困苦
ニ克ツコト)。帰ツテ熱ヲ見ルニ七度二分アリ、動カズ注
意スル。五分マデ昇ツタ。

九月十八日 金 晴 朝雨全ク止マズ。傘持チテ登校、
ベントウヲタベ、午後マデ済シテ帰ル。四時限り歯痛ミテ
困ル。(後略)

九月十九日 土 曇 朝歯ガ痛ム(夜半ヨリ痛ミ出シ一
度止ツタモノ)。学校ヲ休ム。尤モ後ニハ治マツタ故ニ出
校シテ見タガ生徒ハ知ラセテアツタ故ニ居ラス。(後略)

九月二十二日 火 晴 夜眠ラレナンダ。カルモチンヲ
一度、ネルベンヲ一度飲ンデ少シツ、二回眠ツタノミ。身
体ハ硬バル。声ハ出ズ。病氣ハマルデ以前ノ状ニ立返ツタ。

斯ウ躰キ／＼シテハ治ル期ハアルマイ。(後略)

九月二十四日 木 曇雨 午前哲学科ノ生徒欠席ニテ返ル。午後時間遅クナリシタメ急ギテ往キシタメカ言語出デガタク遂ニ言ハレヌヤウニナリテ三分ホド早クヤメテカヘル。

九月二十五日 金 半晴 二時間メカラ出テ五時間ヲ済マシ銀行ニ行キ、眼鏡ヲ買ウテ返ル。(中略) 夜土曜会デ人々来タガ失礼シテ寝タ。

九月二十六日 土 晴 朝神〈学部〉一年ノ組デ声ガ少シモ出サレン。須ガ凝ツテ話ガ出来ン。帰ツテ蜂(注蜂印葡萄酒ナリ)ヲ飲ミ其他種々ノ手術ヲ廻ラシテ行ツタガ三四時トモ同ク声ガ出ズ。(後略)

十月四日 日 晴 (前略) 礼拝松本〈益吉〉氏、放蕩児ト云フ題。何ヤラ云ウテ居タ。(後略)

十月五日 月 晴 阪急湯デ体重ヲ計ルト昨日ハ十二貫四百目アツタガ今朝ハ二百目シカナイ。学校へ出ルト脚ガ殆ド歩ケヌ。帰路ニハ吐キタウニナツタノヲ漸クカヘル。

(後略)

十月六日 火 晴 朝阪急湯ニ往ク。今日ハ試験前ノ休み。(後略)

十月七日 水 晴 夜半ヨリ眼ガサメテ寝ラレズ、学校

へ行クト司会ヲ頼マレル。声ガ出ヌ、其カラ四時間立チツメ。(後略)

十月八日 木 曇雨 採点ヲスルニ眠氣シキリニ来テ堪ヘズ。夕刻マデカ、リテ一問ダケス。是デハ此学期採点不可能ナルコトヲ発見シタリ。一問ダケヲ答案トスル考ニナツタ。

十月十日 土 晴 一年ノ試験ト二年ノ監督ヲスル。声ヨク出ル。コリガ除カレタ。(後略)

十月十一日 日 晴 柳原〈正義〉ノ説教。〈中央〉講堂へ入ツタトキ不良青年ラシイ奴ガ一人入ッテ往ツテ直ニ他ノ二人ト出テ往ツタ。其等デアラウ、其日ヨイ男ノ履物ガ三足ナクナツタノヲハイテツタ奴ハ。(中略) 今日頭非常ニワルク夜ネムラレズ、カルモチンヲ飲ム。(後略)

十月十四日 水 晴 学校ニ出テ試験ノコトヲ岸波〈常蔵〉サンニ頼ンデ置イテ直グニ帰ル。(後略)

十月十七日 土 晴 朝少シ雨ガ降ツテ何如カと思ウテ居ルト直ニ晴レタ。紅鉛筆買ヒニ往ツテ運動会場ヲ一寸ノゾイテ帰ルト(中略) 皆運動ヲ見ニ往ツタ(後略)

十月十九日 月 晴 学校へ出タガ声出デズ一時間ダケニシテ帰ル。(後略)

十月二十日 火 晴 学校ヲ休ミ声ヲ快復スル、(後略)

十月二十一日 水 晴 一時限ノ一年Aハ苦シイナガラ
何ウカ斯ウカ済マセタ。二時ノ哲学ニハ大ニ困ツタ。午後
ノ国文ニ於テモ同様、悲觀シテ家ニ歸ルト、戸ヲ付ケル大
工ガ来テ晩マデコト／＼トヤツテ居タ。不愉快ナ日デアッ
タ。(後略)

十月二十二日 木 晴 三時間ノ哲学ヲヤツタガ、迎モ
今日声ノ見込ガナイノデ午後二年ノ漢文ヲヤス。(後略)
十月二十三日 金 晴 今日稍楽ニ業ヲ成シ終ル。(後
略)

十月二十四日 土 晴 神学(部)一年全部退学。(試
験ニ不正アリシタメ)業ナクシテカヘル。三時間目ニ眼鏡
ヲ忘レ、取りニカヘリ再ビ往キタルタメ、大ニ弱リ声モ出
ズ。(後略)

十月二十五日 日 晴 礼拝柳原(正義)。(後略)
十月二十六日 月 晴 課業ドウカカウカ済ム。頸部ノ

コリ甚シ。(後略)
十月二十八日 水 晴 昨夜睡眠不足。仕方ガナイ学校
へ出ル。午後教科書ヲ差ヘテ行ク。熱七度三分アル。又湯
ヲヤメル。

十月二十九日 木 雨 午後ノ時間ヲ二限ニ繰上ゲル。
熱七度一分ニ及ブ。休養ヲトル。(中略)(村上)醇造ハ石

屋川へ斥候演習濡レテカヘル。

十月三十日 金 曇 二時ニ出テ午後マデ居テカヘル。
感冒ノタメ声出デズ大ニ困ツタ。救霊隊ノモノ天使ヲ売り
ニ来ル。岸波(常蔵)サンデモ其ハイラン。銭ガ要レバ十
銭アゲマスト云ウテ寄付サレタ。恐ラクハ憫ムベキ人ドモ
ノ口ニハ入ラズ何処カ途中デ其銭ハ減エルデアラウ。(F・
ヒリアド氏ガ十銭ヤル。(G・L・)ウォータス氏ハ読メ
マセント云フ。(F・)ヒ(ヒリアド)氏ガ読ムモノハナイ、
十銭ヤルノヂャト教ヘタガ買ハナンダ。予モ金ノ持合せガ
ナクテ買ハナンダ。(後略)

十月三十一日 土 晴 (前略)式ニ行ク。松本(益吉)
サンノ話デアツサリスム。コレデヨイ。何処ノ生徒カ蹴球
ヲ始メウトイフ所デアッタ。(後略)

十一月一日 日 曇 朝起キルト脇ニ寒氣ガシタと思フ
ニツレ、急ニ胸部一面ノ異様ナ圧迫ヲ感ジ熱モ上ラウトス
ルノデ解熱剤ヲノンデ終日闘ヒ、九時少シク熱ノ下ルノヲ
見テ寝ニ就ク、恐ロシイ日デアッタ。(後略)

十一月二日 月 晴 体温終日七度二分ニアリテ動カズ、
床ニ在リテ保養ス。昨日吉崎(彦一)サン死ンデ今日齊
藤一円出シテ貰ヒニ来ル。

十一月三日 火 晴 体温昇ラズ、脈搏モマシ、床ヲ離

レテ室内ノ日ヲ送ル。夕刻六度八分ニナリ暫クシテ下降ス。体育^{デー}ニテ二時間ノ後ハ其方面ノ談ガアルゲナ。其後二時カラ吉崎^{（彦一）}サンノ葬式ガ同ジ場所デアツテ^{（村上）}八重行ク。六時前ニ帰ツテ、今迄式ガアツタト云フ。葬式ノ後同ジ場所デ活動ガアル。^{（後略）}

十一月四日 水 晴 学校へ出ル。熱モ上ラズ。声モ割合ニ楽デアツタガ、例ノコリガ頻リニコミ上ゲテ困シク、二時教ヘテ帰ツタマ、又尻古垂レル、兎ニ角今日ノハコリノ方ノ悩ミハ非常ニ烈シク腦ヲ衝イテ顛倒セントスルヤウデアツタ。^{（後略）}

十一月五日 木 晴 不眠ノタメコリ強ク尚一日学校ヲ休ム。青谷ニ行ク。洗ハズニカヘル。午後眠ル。夕刻熱七度二分ニ昇ル、起キテ少シク用事ヲスル、其タメニヤ又不眠、アマリ我慢ガ強カッタ。何モ計ラズ又言フマイ。神ノ御手ニ任セント悔改ノ祈ヲ捧ゲル。

十一月六日 金 晴 嬉シキ日デアル。現住ノ過ヲ悔ヒ神ノ自然ニ委ネマツリ平安ナル心モ生ジ、頭モ直ニ癒ル。学校ヨリ早メニ出テハミル館ノ部会ニ至リ、九時三年ヲ繰上ゲルノデ授業ヲ済マシ^{（一年ハ有馬ニ行ツタ）}再ビハミル館ニ行ク。砂本^{（貞吉）}、松本^{（益吉）}、田中^{（義弘）}、本間サン、其他人々ニ逢フ。十一時松本^{（益吉）}、田中^{（義}

弘[）]ト共ニ出テカヘル。此兄弟等ハ皆予ガ病ヲ真ニ氣遣ウテクレル人デアル。午後一年ノ答案ヲカタツケル。

十一月七日 土 晴 少シ早メニ出カケテ吉崎^{（彦一）}ヘ悔ニ行キ^{（三円贈ル）}、文科教員室デ少シ休ミ、礼拝ノ時間チャベルヘ往クト意外ニモ今日ハ賀川^{（豊彦）}君ノ談デアツタ。欧米ノ見聞ヲ話ス、見テ分ツテ考ヘテ談スノザヤカラ面白イ。後ノ課ハ一時間アルガ休ニスルト云フ広告ガアツテカヘル。午後関西中等校ノ雄弁会ガアルガ、答案ヲ調べテ家ニ居テ。^{（後略）}

十一月八日 日 晴 礼拝柳原^{（正義）}氏力ノ宗教。午後今日ハ種々ノコトヲ心配シタルヨリ昂奮シテ殆ド狂氣シタリ。^{（後略）}

十一月九日 月 晴 昨夜三時間トモ寝タ。体カタマリ非常ニ不愉快。キメテアル医者ノ所ヘ行クトスル。菊池ト云フノデアツタガ、予ハドウモ分ツタ病氣ヲ見ズ知ラズノ医者ノ所ニ行クヨリモ、戸倉ガヨカラウト思ウテ其処ヘ行ク。ヨク分ツタ、而シテヨイ注射ガアツタノデシテ貰ウテカヘル。午後三時間許寝ル。^{（中略）}非常ニダルイ。分レタヤウナ、然シ氣持ヨリコリモ殆ド忘レタヤウダ。此注射ヲ今年中ヤレバタシカニ若返ルト思フ。夜、^{（村上）}八重ニ松本^{（益吉）}ニモ田中^{（義弘）}ニモ往テモラウ。方々ニ

悦ヲ伝ヘタ。八時二床ニ就テ其俣夜ガ明ケルマデ知ラナン
ダ。(後略)

十一月十日 火 晴 氣持ヨク過シ午後青谷ノ湯ニ往キ
タルタメカ熱少シ昇ル。神学部カラ点数報告ヲ求メテ来タ
ノデ、ヤツテ仕舞フツモリデヤツタガ少シノコル、(後略)

十一月十一日 水 曇 朝点数ヲト、ノヘテ送ル。其ガ
タメニヤ頭鳴ハゲシク注射ノ帰リハ倒レントスルホド困ル。
而シテ飯タベテヤツト横ニナツタ所ヘ松本君来ラレ予ガ為
メニ話セラレル。声出デズ、甚ダクルシ。(後略)

十一月十三日 金 曇小雨 傘サシテ戸倉ニ往ク。途中
曾根ニ逢ウテ契沖全集ノコト話シテ置ク。コレデ安心。(後
略)(注以下連日病状詳述シアリヨリ略ス)。

十一月二十三日 日 晴 今田(恵)氏説教。午後散歩
ノトキ(W・J・M・)クラッグ氏一族、岸波(常蔵)氏
トニテ所ニ於テ出逢フ。夕刻畑(歛三)、大藤(豊)、新明
(正道)三氏見舞ニ来テ下サル。

十一月二十六日 木 曇 午前役場ニ所得税ノツケガ来
ヌノデ貰ヒニ行キ金庫ニ払ウテカヘル。午後採点ヲ片ツケ
(村上) 醇造ニ写シテモラフ。(中略) 夜組合ヲスル。内村
(順也)、真鍋(由郎)、戸倉夫婦、松本(益吉)、山口、ソ
レカラ(村上) 謙介、(村上) すみれ、(村上) 恂一モ来テ

クレ久シ振リニ樂シイ会ヲシタ。

十一月二十九日 日 晴 礼拝、龜徳(一男)サンガ例
ノ思付ヲ話シテ居タ。信仰トハ自分ノ心ニ一個ノキリスト
ヲ創造スルノデヤゲナ。(後略)

十二月四日 金 晴 (前略) 神学部カラ追試験ノ問題
ヲスグセヨト云ウテ来ル。頭ガ悪クナツテ湯ニ行ク。(後略)

十二月六日 日 晴 礼拝柳原(正義)、旅行中自分ノ
感ジタコトモヲ話ス。午後婦人会ガ吉崎未亡人ノ送別会
ヲシタノデ留守ニナリ湯ニ往カナンダガ、杖ナシデいろは
湯ノ筋マデ行キ下リテ旗塚通ヲカヘル。解熱トオキシフル
ヲ買ウテ来ル。(後略)

十二月七日 月 晴 (前略)(村上) 八重(村上) 謙介
ノ所ヘ泊リニ行ク。(村上) 謙介ハ生徒ト共ニ篠山ニ往ツタ。
十二月十日 木 晴 (前略) 出カヘテ春日野墓地ヲ拔
ケテ熊内辺マデ行テ来ル。(村上) 謙介篠山ヨリ帰リテ居タ。
(村上) すみれモ来テ一緒ニ飯タベル。賑カデアツタ。神
ハ此良キ児等ヲ与ヘタマウタ。我ヲシテ此世ニ於テモヨル
所アラシメタマウタリ恵ハ浅イコトデハナイ。

十二月十一日 金 晴 身体ノ工合治ル。午前青谷湯ニ
往ツタガ休ニテカヘル。午後少シク東ノ方ヲ運動ス。夜砂
本(貞吉)、松本(益吉)、田中(義弘)三人来宅、広島会。

面白クスキ焼ヲ食フ。

十二月十二日 土 晴 食後湯ニ往ク。体量十二貫八百目余アリ。皇孫殿下ノ御命名式ニテ学校多クハ休ミ。市中賑ハフ。ピストル強盗守 神健^(マ)ニ捕ヘラル^(マ)。号外ニ人々ハ驚イタ。午後少シ散歩ス。

十二月十三日 日 晴 礼拝原野^(駿雄)ノ説教ヲ聞ク。基督ノ目的ハ社会統一ニアルトカ言フヤウニ聞エタ。(後略)

十二月十八日 金 ⁽²²⁾ 村上⁽²²⁾ 醇造帰ツテ松本^(益吉)ノ昨夜頓死セルヲ報ズ。愕然^(村上)。八重ヲ往カス。(後略)

十二月十九日 土 晴 ^(村上) 八重松本へ手伝ニ行ク。

午後^(村上) 謙介来ル。次デ^(村上) すみれモ^(村上) 恂一モ来ル。^(村上) すみれ松本へ行ツテクル。香典四円ト^(村上) 謙介カラ三円計七円包ム。夜^(村上) 謙介ソレヲ以テ通夜ニ往ク。夜半、松本、英チャン^{(松本氏長女(英子)、母上、(村上)直枝(三女)、(村上)照江(四女)、(村上)博重(長男)、祖父、父上ニ夢デ会ウタ。皆非常ニ嬉ゲニシテ居タ。}

十二月二十日 日 晴 松本^(益吉)ノ葬式デ行キタイト思ウタガ脈搏ハ疾イノデヤメタ。(後略)

十二月二十一日 月 晴 午後松本へ悔ニ行ク。篠村

君ニ逢ウテ暫ク談ラスル。内吉岡氏ガ来テ上リ込ンダノデ辞シカヘル。^(松本) 春枝様ニモ逢ウタガ其顔ハ悲ノ程度ヲ越シテ物ヲ睨ム鬼ノヤウニ考ヘラレタガ、誠ニ無理ノナイ氣ノ毒ナコトデアル。今田^(恵) 君見舞ニ来テクレテ暫ク談ス。(後略)

十二月二十二日 火 晴 ^(前略) 金ノコトデ少シ考ヘルコトガアツタ。ソレガタメデモアルマイガ、夜半二目ガ醒メテ六時キクマデ寝ラレナンド。

十二月二十四日 木 晴 ^(前略) 職員住所ノ表ヲ貰ヒニ文科へ行クト^(H・F・) ウヅ^(ウオース) 氏ニ逢ウタ。(後略)

十二月二十七日 日 曇雨 礼拝柳原^(正義)、脈搏ガ疾イノデ非常ニ注意スル。身体モコリデ動キニク、抑ヘラレルヤウナ氣ガシテ漸ク戻ツテ来ル。(後略)

大正十五年

一月一日 金 晴 昨夜種々ノ事ヲシテ寝時ガスギタノト齒ガ時々痛ンダノデ不眠ニ陥リ氣持悪ク身体モ凝ツテ居ルノデ祝賀式ニ出ナンダ。^(中略) 不眠ノお蔭デ神經衰弱ガ起ツテ悩マシカッタガ、後ニ其ハ神様ガ送信ヲ打破シテ下サル手段デアッタト感謝シタ。(後略)

一月二日 土 晴 二時間シカ眠レナンダ（眠ラン夢

ヲ見テ實際眠ツタノカモ知レン）。兎ニ角ソレデ猛烈ナル神經衰弱ニ侵サレ、現レテ來ル尽クガ予ヲ呪フ呪ヒデアリ、為ルコトナスコト悉クガ罪トナツテ予ヲ迫メタ。眼ヲ明ケテ考ヘレバ何デモナイコト、眼ヲ閉ヂルトスグソレニナル。苦シカッタ。大罪ヲ犯シテ居ルモノガ此困シサニ自首シタリ、詰ランコトノタメニ自殺スルモノナドアル、是ヂヤト思ウタ。予モ是ホド困シケレバ死デモ宜シト思ウテ百二十モ脈搏ガスルノヲ湯ニ行ツタリ上野ノ東マデ運動シタリシタガ、才蔭デ迷信ヲ打破セラレ涼シイ心持ニナツタ。夜アダリンヲ服ンデ床ニ入ル。十二時間快眠。

一月三日 日 晴 支度シテ〈関西学院〉教会へ行ク

ト柳原（正義）君ノ説教が始マツテ居タ。昨夜井上（匡）⁽²³⁾先生ガ腦溢血デ急ニ死ナレタトイフ広告ガ有ツタ。所ガ聴衆ノ反響ハ極メテ静デアツタラシイ。松本（益吉）君ヨリ前ニ死ンダラ大ナル同情ヲ動ジタデアラウ。時トイフモノハ大切ヂヤ。人間ニハ暗ヨリ暗ニ送ラレテ同情スベキ人多イ。時ニヨツテ翼ヲ生ジタ豪傑偉人ハ屁デモナイ。夜謡ヲウタウテ見ル。学校始ルデ声ヲ練習スル積デアツタ。（村上）八重ガ飛込ンデ到々東北ト狸々トヲ謡ウタ。ソレガタメカ床ニ入ルモ少シモ眠クナラズ大二困ツタ。午食別宅皆

來テ食フ。嬉シカッタ。

一月四日 月 半晴 又意義ナク不眠ニ明ケタ。然シ

一々加ヘテ見レバ必要ナダケハ寢テ居ルト思フ。村井吉兵衛ノ死ヲ讀ンデ病後ノ衰弱ノ治ラヌノハ予ダケデナイト⁽²⁴⁾思フ。スルト此病軀ヲモツテ何時マデ職ヲ汚サンヤトイフコトガ思ヒ出サレテ悩ンダガ、吾人ハ只前ヲ見テ進ムベキノミ。眼モ口モ前ニアル。博弘ヲ主トスル耳ハ横ニアルガ、ソレデモ後ヲ困ウテ前ニ向ツテ開カレテ居ル。吾人ノ世界ハ前デアル。他ヲ益シ悦バル、モノトナツテ進ムベキノミ。後ヲ見テ彼は思フノハ迷ヂヤト教ヘラレタ。朝散歩スル。午前二井上（匡）氏ヲ弔ツタ。頭鳴烈シクアダリンヲ服ンデ寢ル。

一月七日 木 朝晴午後雪 三時間確ニネタ。其他ニモ

寢タカ知ラン。寢テ居テ寢ヌトイフ老人ノ癖、実ハ一種ノ痴ガアル。予モ己ニ然ウイフ病ガ添ウタカ知ラン。（後略）

一月八日 金 晴曇（前略）学校ガ始ツテ出ル。人々ニ会フ。礼拝ノ祈ヲサセラレタニハ大二困ツタ。帰りニ中学部ニ田中（義弘）君ヲ訪ツタ。（後略）

一月九日 土 曇時々雪 朝湯ニ行カズ。腦ヨリ全身ノ氣分ヨカラズ。学校ヘモ行カズ。但シ西ノ方ニ少シ運動ス。午後物ヲ少シ搜索シタル為カ頭鳴一層甚シ。田中（義弘）

ヲ訪ネタガ不在ナリシヨリ、鍛冶屋ヨリ大石川ノ辺ニ出デ迂回シツ、カヘル。此ノ如ク少シノ事ガ障ルヤウデハ教職ハツトマラス。永ク居テ学校ニ迷惑ヲカクルヨリ運ヲ是マデノモノト定メテ三月限辭職スルコトニシタ。暫ク休養シテ兎ニ角神ノ為ニハタラキ一身ノ仕事ヲモ片付ケサセテ貰フヤウニ力ヲ尽サウ。神ヨ今後ノ一族ヲ助ケタマヘ。

(註、次ノ書簡下稿ハ此頃書イタモノラシイ。誰宛ノモノカ不明。又果シテ發送シタカドウカモ不明デアルガ参考ニ記ス)

時々御目にかゝりながらも近頃は殊に御無礼を重ねて居ます。一度御宅ニ罷出て御礼も述べ又少しお話も申上たいと存じて居ますが病体種々の事に妨げられて其意を得ません。学校にては遠慮して何事も申上げずに居ります。実は拙老の病氣余程快くなつたと思つて出校致しましたが実地にあてて見ると何程も軽くなつては居りません。一方には新に増加つたと思ふやうな種々の不自由を発見しました。それでこれは到底職に堪へざるものになつたと家族とも談して居ます。就ては既に老体でもあり快復する見込なきもの、何日までも職にあるは無意義なることのみならず学校の御事業に妨を生ぜしめ学生に対しても責任を果たさざることに、相成ますれば此際三月限りにて断然辭職致したいと思

うて居る次第であります。其に就き是は家族にも計らず小生一人の甚だ勝手なる且恥かしき一の御願を持て居ります。私は幼時父を失ひ其後祖父が悪人に欺かれてなれぬ商業を始め瞬くうちに財産を全く亡ふやうになりました。其後に育ちまして全く資産のなきものであります。加ふるに青年の時より待遇に身を委ねるやうになりまして以来学校に轉じまして近來までは與へらるゝは只食して行くだけ、勿論其に満足して働いて來ましたが、かゝる有様で貯蓄といふものも志も致さねば隨て全くないものであります。勿論謙介等の世話になつて余生を送る積ですが、眼前種々の事に於て費用を要するまだ修行中の男女兒もあり、是等が皆彼等の世話になるとすれば彼等もまだ薄給の身の非常に困難することゝ存じます。それで特別の御詮議を以て恩給を付けるやうにしては頂かれまいかと思ふのであります。今より四年勤めますれば大正十九年、大正四年より満十五年になりまして、規則の上から恩給は頂かれる筈で御座います。が拙老は明治三十六年以來働いて居りますもので、加奈陀、南美の合併により近來の大学院の發展する一転機の置かれた頃から見ても十五年以上勤めて居ます。特別に恩給を加へられることがあつたとしても明治前より働いて居る人は極めて少なく其諸兄は何れも御健全にて五六年

の中に、大正十九年前、退職せられうと思はれる士は一人もありません。別に悪例を始めるやうな憂はありますまい。元来恩給の初年を両派聯立して高等部も生れたる当年に由らずして、退職手当の事が永々と詮議の末、漸く決定せられるに至りました。大正四年に置くことは重大なる意味もなく必要もなかったこと、存じます。殊に先年は小使の中にも特別の人として恩給を与へられた例もあります。壮健なれば退職する必要もなく、また退職しても何か自活の方法もあると存じますが衰老の身を以て重患に侵され学校を退くやうになったものは、座して死を待つほか如何することも出来ません。斯様な次第でありますから、余り長くもあるまじき私の生存中、恩給だけでも頂くことが出来ますれば大なる助りです。

(下稿ハ以上で斷シテ居ル。学院ハ本人退職ニ対スル特別詮議トシテ大正四年四月乃至大正十五年三月迄ノ割ノ退職金ト五百円宛四年間特別手当ヲ給シタガ其通知ハ本人ノ生前ニハ達シナカッタ。)

一月十日 日 雪晴曇 ネルベンモカルモチンモ効ナク一夜ヲ通ジテ十一時半ヨリ二時半頃マデ眠ツタケ。六時半頃ヨリ五毛天神前ニ下カラアガツテ上カラ帰ル。其帰、雨小鼻吸氣ニアタリテポツタリ障ガルコト起リ大ニ困

難。且ツ身体自ラ走りテ止マラズ、電柱ニ取付イテ纔ニ止マル。汗出テ半死半生ニテ家ニ着ク。(後略)

一月一日 月 晴 一時限ニ二年B、二時限ニ三年、四時限ニ二年ヲ教ヘテカヘル。中々ムツカシイ。(後略)

一月十二日 火 半晴 朝髭ヲ剃リテ時間ニ後レ神学部ヘ行キ文科ヘモ行ク。福田氏ト暫ク談話ス。定方(未七郎)ノ画ガ中学部ノ廊ニ張ツテアルト(村上)謙介ガ知ラセテクレタノデ食事ヲスマシテ直ニ行ツタガモウナカッタ。岸波(常藏)氏来テ下サル。辭職ノコト、恩給ノコト、ヲ言ウテ頼ンデ置ク。夜(村上)八重河上(丈太郎)サンノ宅ヘモ往テ委細ヲ^{マデ}願シ田中(義弘)氏ヘモ其次第ヲ報ジ一切ノコト宜敷御願シテ来ル。九時頃寢テ十二時マデネタリオキタリデ兎ニ角眠ル。其後三時ヲ聞クマデ不眠。後眠リテ醒メタノハ五時過デアッタ。隣家ノ家瓦墜チテ甚シキ響ガシタ。

一月十三日 水 半晴、朝雨 隣家ノ屋上ヨリ瓦四方ニ落チル。危険デアッタ。昨夜不眠ノタメ気分朦朧。午後平賀君訪ネテ来テクレ鶏卵ヲモラフ。好意ヲ思フ。午後(村上)八重ト湯ニ行ク。桑原進サンヨリ葉書。(村上)延枝ヨリ(村上)晴枝ニ手紙。

以上ヲ以テ日誌ハ終ッテ居ル。

一月十四日 柴野〈秀夫〉書記ニプリント渡ス

一月十五日 試験答案ヲ返シプリント残部受取、岸波〈常蔵〉氏来訪

一月十七日 三宅光華氏、田中義弘氏来訪、〈村上〉謙

介ヨリ父辞任ノ次第各方面ニ通知

一月二十日 食事及ビ用便、〈村上〉八重ニテ世話ス

一月二十一日 辞表提出

其後病状一進一退

四月二十日 死去⁽²⁵⁾ 以上。

【注】

(1) 『学生会時報』第十号（大正十三年五月二十日）では「本春四月よりの三校連盟野球戦の成績は次の如し。四月二十三日対同志社八対四勝、四月二十九日対関大十三対A零勝、五月二日対同志社十一対二勝、五月九日対関大五A対一勝」とある。（二頁）。

(2) 『学生会時報』第十号（大正十三年五月二十日）では、個人第一優勝旗平井長太郎君（文三）、個人第二優勝旗川口孝次君（商三）とある。

(3)

「二八六四年（元治一）八月、イギリス、フランス、アメリカ、オランダの四国連合艦隊が下関の砲台を攻撃し攘夷派を屈服させた事件、四国艦隊下関砲撃事件ともいう一八六三（文久三）攘夷期日を五月一〇日とする朝命を實行すべく、長州藩は下関（馬関）海峡で外国船を砲撃した」（『平凡社百科事典』一九八五、第十一卷九八四頁、「馬関戦争」の項）。

(4)

『学院時報』第十一号（一九二四年六月二五日）に以下のとおり学生による感想が掲載されている。「学生のペーゼントと云う事に興味をそゝられてか、焼けつく様に暑い午後の陽の中を、定刻前から続々おしかけて、緑のキャンパスを十重二十重に囲んだ、そのすばらしさは仲々物凄いはかり、赤いバラソルの多い事は特に目をひく。辻野君が現はれて開演の辞を簡単に述べて引き下がると、直ぐその後でお芝居は始まった。仲々手に入つたものですね！あれは学生さんばかりだつか？なんて非常に観衆の内には感心して御座る人もある。嘉平の稲岡君は人気を一手に引き受けて立ち廻る。演出監督辻野君は青いメガホンをひつさげて、声をからして走つて居る。観衆は時と共に数を増して寄宿舎のバルコニーから窓からそこらの小石の上まで、少し小高いと思はれる処にはもう一ぱいに人の山を築いた。それに活氣を得て出演者は、非常に引き締つて、最後まで観衆を酔はせた。文学部劇研

究会第一回演出野外劇地蔵経由来は、かく盛会に終った。
「六・二一・劇の帰り〇・生」。

(5)

『関西学院学報』第四号（一九二四年七月二〇日）に以下のようにある。「専門（ママ）部学生総会 六月二十四日移民問題に関し商、文、神、三学部約九百名の学生、中央講堂に会合し午前十時半より該問題を論じ昼餐を隔て、午後再開し遂に態度を定めて左の決議を為しました」「決議 一、今回米国に於て制定せられたる排日の移民法は正義人道に反するものと認む 一、関西学院学生は正義の上に立脚して米国の反省を求め且該法の撤廃を期す 右決議す」。

(6)

学院史編纂室蔵「青年会記録」に以下のように記述されている。「九月十六日火曜日 あ、この日や藤井先生夫人、長の脊髄病のはて永眠され、午後四時より中央講堂にて告別式行はる。いと厳肅に行はれた。青年会員は会場の接待人並び故夫人の棺を持つの役をつとめた」。

(7)

『関西学院学報』第五号（一九二五年七月三十一日）に以下のようにある。「大正十三年十月十六日（木曜日）午前九時半開始関西学院創立第三十五年記念式を中央講堂に於て挙行しました、儀式の順序は讃美、聖書明読、祈祷、合唱、院長報告に続いて外務参与官代議士永井柳太郎氏の講演あり、次に文部大臣岡田良平氏の祝電朗読、平塚兵庫県知事代理平田産業部長、石橋神戸市長代理の祝辞

朗読、同窓会代表西村祐弁氏の祝辞、山脇県会議長等の祝電披露あり、満堂の会衆にて盛会を極め、式後地下社交室に於て立食の饗応食がありました。就ては記念の為に本学院の沿革を左に略記して記憶を新にし、且つ後日の記録に遺したいと心得ます」。

(8)

『関西学院学報』第五号（一九二五年七月三十一日）に以下のようにある。「学院創立三十五年記念の時機に於て二十年以上勤続職員教師の功勞を表彰するの主旨を以て学院理事会は左の六氏に各高等の置時計一箇つ、を贈呈した。

即ち 名譽院長（文、商講師）吉岡美国、神学部教授チー、エイチ、ヘーデン、同松本益吉、文学部教授村上博輔、高等商業学部教授ダブルユー、ケー、マシユース、中学部教頭真鍋由郎

又同窓会は同一の主旨に依り、前記六氏の各々へ花瓶一對づ、を贈呈した」。

(9)

『高等商業学部同窓会会報』第二号（一九二五年三月三〇日）に以下のよう記載されている。「創立第三十五週年記念大講演会（一九二四—一〇—一六）

栄ある我が学院創立第三十五週年を記念すべく催された。午後六時半開会なるに六時前既に会場立錫の余地無し而も聴衆陸続として入口に殺沓し一時入口を閉鎖するの止む無きに至つた。当夜の聴衆無慮三千を超え大講堂落成

以来未曾有の盛会であつた。講師は何れも吾が学院の先輩で此の記念講演会をして益々意義あらしめた。

一、国際連盟と日本 乾精末氏 Silver Tongue の称ある乾氏は、日本語でも矢張り雄弁だつた。氏独特の諧謔と比喩とを以て、多年氏が密接なる関係を有する国際連盟を明かにし、併はせて日本との關係に及んだ。

一、近代外交の理想 永井柳太郎氏 弁士は人も知る政界の新人、雄弁界の雄たる永井氏、談ずる所は氏の最も得意とする外交問題、警句に次ぐ警句、聴衆をして熱狂せしめずには居かなかつた」。

(10) 『学院時報』第十二号（一九二四年一月二五日）に以下のように記載されている。「去る十月二十〇日午後二時、二十〇日午前十時の二回に渡り学院文学部の講堂に於て、高野山大学教授、学生諸君を迎へ、第八回比較宗教講演会を行つた。聴講者は附近の僧侶等多く、二日共非常な盛会であつた。講演者氏名及びその演題は次の如し。

第一日、一、菩提心の研究 内山秀道君 二、密教に於ける象徴主義とその背景 吉井芳純君 三、印度思想上に於ける仏教の地位 蓮澤淨淳師 四、密教に於ける仏陀と其実現（其一） 梅尾祥雲師
第二日、一、涅槃論 坊岡君 二、三密思想の考察 大北善照君 三、密教に於ける仏陀と其実現（其二） 梅

尾祥雲師」（二頁）

(11) 『学院時報』第十二号（一九二四年一月二五日）に以下のように記載されている。「先きに発会式を挙げた文学部社会科学映画研究会は、十一月十四日十五日両日午後六時より学院中央講堂に於て、第一回映画の会を開催した。提供映画は（中略）『風の国のテス』（中略）『巨人大望』（中略）であつて。尚定評ある学院管絃団の演奏を加へ、非常な人気をもつて迎へられてゐた。（七頁）

(12) 一八六六・七二六（慶応二・六・一五）—一九二六・九・二三、牧師。一八八四年にカナダ・メソジスト教会の宣教師C・S・イービーから受洗し、築地教会で伝道に携わり上田教会、中央会堂、麻布、牛込、甲府、静岡の各教会を歴任した。（『日本基督教歴史大辞典』教文館、一九八八）

(13) 『関西学院学報』第五号（一九二五年七月三一日）に以下のようにある。「三月一日（日曜日）日本メソヂスト伝道局長波多野傳四郎氏を東京より聘し、午後二時中央講堂に於て例年の通卒業生に対する学年末礼拝式を挙げ、始めに爽快優雅なる聖樂ありて引続き「既成基督教と青年」の題下に熱心なる説教を与へられ聴衆無慮五六百謹聴したる好集会でありました。」

(14) 『関西学院学報』第五号（一九二五年七月三一日）に以下のようにある。「三月七日（土曜日）学院第三十五回卒業證書授与式举行せられ式の順序は略例年の通にて卒

業證書授与の後ベーツ院長の告示に続いて特別講演者は東京より聘したる前朝鮮政務総監有吉忠一氏にして「欧州に於ける人種問題研究の趨勢を論じて我國青年の覚悟に及ぶ」てふ題下に欧米の学者政治家の言論を引証して準備豊富なる講演を滔々と与へられ謹聴の会衆満堂非常の盛会にて、之れに続いて平塚兵庫県知事の訓示ありそれより祝辞、答辞等例年の如くにて式を閉ち、社交室に於て茶菓の饗応があつた。」

(15)

共產主義インターナショナル。世界各国の共產党の國際組織。一九一九年、レーニンらの指導下にモスクワで創立、國際共產主義運動の指導にあたつたが、四三年、解散。〔広辞苑第五版〕岩波書店、一九九八

(16)

明治十六年（一八八三）―昭和三十九年（一九六四）十二月二十九日
教育功労者。岐阜県で生まれ、三重県伊勢市で育つた。神戸一中で鶴崎久米一校長の教育をうけ、広島高等師範学校を卒えて一時、同校付属中学校や県立第二神戸中学校で教べんを取つた。退いて京都帝国大学英文学科に入り、同大学卒後、大正十三年（一九二四）三月一日、神戸一中校長に、就任した。（二代目）翌年四月十六日から十五年二月二十日まで、第二回卒業生、岡崎忠雄（当時岡崎銀行役員）らの援助を得て、パブリックスクールの中等教育を視察にめ渡英、イートン、モーバラーなど

(17)

名門校やアボッツホルムなどを訪れて伝統と異彩を誇る学校を視察して帰国。〔『兵庫人物事典（中）』のじぎく文庫、一九六六年、四頁〕。

〔父三戸吉太郎儀永々病氣の処今五月二日午後十時四十分、平和の眠につきました在世中皆様より御厚意を受けました事を難有存じます乍失儀紙上にて御礼旁御知らせ申上ます。告別式は五月四日午後三時御影教会堂にて施行致しました。五月五日、兵庫県武庫郡御影住吉梅木、妻三戸ひで、男勳〕。

『教界時報』一七四九号（一九二五年五月八日）に公告

が掲載されている。

(18)

地鹽会について、『同窓会報』第一号（一九二四）に「地鹽会に就て」（木村楨橘）、『地鹽会』の経過（小穴忠実）、『地鹽会例会案内』『地鹽会規則』（一六―一九頁）、『高等商業学部二十年史』（一九三一）に「地鹽会」（二二四頁）の記述がある。

(19)

『関西学院学報』（第六号、一九二六年七月十五日）に「吉崎博士ハ快樂ナル氣質ト豊富ナル基督者性格ノ稀ナル学者ニシテ恐ラク博士ハ日本ニ於テ最上ノ新約学者タリシナラン、博士ハ学生ヨリ愛慕セラレタル教授ニシテ又学生ノ友ナリシナリ、同一ノ年ニ神学部ガスルニ学者ヲ失フタルハ最モ甚シキ打撃ナリ従ツテ是等ノ二人ニ代ルベキ後任ヲ得ンハ容易ノ事ニ非ザルナリ」（一頁）、「神

学部教授吉崎彦一博士は肋膜炎を患ひて遂に大正十四年十一月一日五十六歳にて逝去せられた」とある。

(20) 昭和天皇の第一子、照宮成子内親王（のちの東久邇成子、一九二五・一二・六―一九六一・七・二三）のこと。

(21) 大正一四年一月の東京、神奈川、大阪、京都、兵庫でピストルを使った十件を超える殺人強盗などの事件で、大正一二年に恩赦減刑で仮出獄していた大西性次郎の犯行。偽名で守上健次を名乗っていたのでピス建と呼ばれていた。

(22) 『関西学院学報』（第六号、一九二六年七月十五日）に「松本博士ハ稀ナル天才又近代式博識ノ学者ニシテ真理ニ対スル裁断ト応用トハ平衡ヲ保持セラレタリ又例外ナル博士ノ多能ハ神学部ノ一教授ニ止マラズシテ能ク商学部ノ教授等ト経済産業上ノ問題ヲ論ジ亦文学部ノ教授等ト哲学社会学上ノ問題ヲ論議セラレタリ又運動競技ノ日ニ当ツテハ常ニ其ノ會長タランコトヲ請ハレタリ又副院長トシテ博士ハ常ニ院長ノ事務ニ多大ノ助力ヲ与ヘラレタ、余ハ永久ニ此人ヲ慕フ、余ハ五ヶ年ノ永キ間同ジ卓ニ倚ツテ執務ヲ共ニシタリ然レドモ一回ダモ不愉快ヲ感ジタルコトナシ、博士ノ親切ニシテ強ク澆刺タル精神ガ常ニ吾等ト共ニアランコトヲ希フナリ」（一頁）、「同年十二月十七日副院長兼神学部教授松本益吉博士は脳溢血のために之れ亦同齡を以て俄かに逝去せられた同博士のためには学院多年懸案の一たりし副院長の住宅新築初めて

竣成し同年六月の初め之れに移転せらるゝ、や間もなく愛嬢を亡くせられ後半年にして其の悲歎の未だ忘れられざるに博士自身の上に此一大事が起つたのである」（二頁）とある。

松本益吉を追悼する文章は、『教界時報』一七八四号、鶴崎庚午郎「松本益吉兄を悼む」（一九二六年一月五日）、『教界時報』一七八五号、田中義弘「松本益吉君の永眠を悲みて」（一九二六年一月二日）、『神学評論』記念特輯号、柳原正義「松本益吉先生の思い出」（神学評論社、一九三四年一〇月）などがある。

(23) 『関西学院学報』（第六号、一九二六年七月十五日）に「十五年一月二日中学部教諭井上匡氏も亦脳溢血に罹り逝かれた、齡五十三であつた氏は数学に堪能にして氏の六年間の勤務は中学部のために多くの神益を与へられた」（二頁）とある。

(24) 一八六四―一九二六、明治―大正時代の実業家。文久四年一月二日生まれ。明治二三年村井兄弟商会をおこす。国産初の両切り紙巻きたばこ「サンライズ」を製造・販売し、宣伝合戦で岩谷松平の「天狗煙草」に対抗。三七年たばこの専売制移行により村井銀行を創立し、鉱山・石油業に進出した。大正一五年一月二日死去。六十三歳。京都出身。『日本人名大辞典』（講談社、二〇〇二）。

(25) 「村上教授ハ決シテ何事ヲモ辞スルコトナク亦咎クコトナク学院ノタメニ献身的奉仕ヲセラレタリ。教授ノ健康

ハ脆弱ナルニモ係ラズ明治四十五年以來毫モ倦怠ナク文学部ニ教鞭ヲ執ラレ或ハ教務を兼ね其以前ノ十年間ハ中学部並ニ神学部ノタメニ尽サレタリ教授ハ真摯ナル基督教信仰ヲ以テ国、漢両学ヲ兼ね併セタル該博ナル学者ナリキ。吾人ハ斯ル種類ノ多クノ人ヲ吾カ基督教者中ニ有シタルコトヲ一ノ驚異トスルナリ如何トナレバ基督教者デアツテ古典家ノ特種ノ教授ヲ得ンコトノ困難ハ漸ク加ハリツ、アルガ故ナリ。儒教ハ日本ノ精神的文化ニ大部分ヲ働キタリ而シテ其勢力ノ衰退ト共ニ漢学者ノ減退スルハ之ヲ惜ミテ亦止ムヲ得ザルナリ、故ニ村上教授ノ逝去ハ真摯誠忠ナル基督教者トシテノ国漢歴史家及文学者中ニ更ニ一人ノ損失ヲ加ヘタルヲ悲シムナリ」(二頁)とある。村上博輔を追悼する文章は、以下などにみられる。

『教界時報』一八〇六号、丹波甚八「故村上博輔先生を憶ふ」(一九二六年六月一八日)、『文学部回顧』(関西学院文学会、一九三二)「文学部の宝」一三四—一三九頁。『関西学院時報』第二〇号、「故村上博輔教授略歴」(一九二六年四月三〇日)、『高等商業学部同窓会会報』第五号、石本徳三「故村上博輔先生を憶ふ」(一九二六年八月五日)、『教界時報』一八〇五号、村上謙介「亡父村上博輔略伝」(一九二六年六月二日)、『教界時報』一八〇六号、村上謙介「亡父村上博輔略伝(下)」(一九二六年六月一八日)。

『村上博輔日記抄』の翻刻を終えるにあたって

二〇〇一年三月刊行の『関西学院史記要』第七号で『村上博輔日記抄』(二)の翻刻を開始して以来、二〇一五年三月刊行のこの第二十一号(十四)で完結することになりました(ただし、第十一号には掲載されていません)。翻刻を開始した二〇〇一年は、関西学院が創立一一一周年記念行事を終えた次の年であり、完結する二〇一五年は、一二五周年事業を終えた次の年であることを考えると、この翻刻事業がいかにも息の長いものであったかを理解していただけると思います。

学院史資料室(一九七八年設置)時代の一九九一年に創刊号が刊行された『関西学院史記要』は、同資料室が学院史編纂室と改称(二〇〇〇年)されて以降も続刊され、今日に至っています。その長い歴史をもつ『関西学院史記要』事業の中でも、この翻刻事業はもともと息の長いシリーズとなりました。というのは、この翻刻と同時に開始された「シリーズ 関西学院の人びと」(現在までに、二十名が紹介されています)は現在も継続中ですが、毎号掲載された訳ではないからです。

この『村上博輔日記抄』は、そのタイトルが示すように、村上博輔が書き残したものの、現在ではその所在が不明な『村上博輔日記』をもとに、息子の謙介が「主トシテ学院普通科関係記事・原文仮名ハ片仮名及平仮名年ニヨリ異ナル・今悉ク片仮名ヲ用」い、抜粋し書き残したものです。その期間は、博輔が関西学院に就任する直前の一九〇三明治三六）年三月三〇日から、病氣のために退職し、死去する直前の二六（大正一五）年一月一三日までの関西学院を活写した日記です。底本にした抜粋日記は、全二巻（第一巻は一九一二年三月三一日まで、第二巻は同年四月二日から執筆されています）からなっており、本編纂室が所蔵する抄本原本をもとに翻刻したものです。

村上博輔（慶應元年一〇月一五日～一九二六年四月二〇日）は、広島県佐伯郡石内村で生まれ、郷土の儒者吉村斐山、河野小石らに漢籍を学び、一八七九（明治一二）年五月以降から英語を学び始めました。同年七月佐伯郡草津村小学校上各科を試験により全科を卒業し、その後一時同校の助教諭となり、八二（明治一五）年からドイツ語などを学び始め、八六（明治一九）年には広島県御用掛となり、鉱山科に勤務するかたわら歴史・文学を学びました。関西学院が創立された一八八九（明治二二）年一月に同職を辞

職し、同月二二日、広島美以教会でW・R・ランバスより受洗し、九四（明治二七）年八月に南メソヂスト監督教会伝道師となりました。一九〇一（明治三四）年九月に広島市広陵中学校教頭となりましたが、一九〇三（明治三六）年三月に同職を辞職し、四月に関西学院普通学部教員に就任しました。担当したのは国語と漢文でした。一九〇九（明治四三）年四月には普通学部教務主任となりました。一九一二（明治四五）年四月、高等学部（文科・商科）を設置するに際し、文科教員となりました。一九二一（大正一〇）年の名称変更により、文学部教授となりました。今掲載される最終回の日記（一九二六年一月一三日）で書かれているように、病氣のため辞表を提出し、四月二〇日、死去しました（井上琢智「資料解説」『関西学院史記要』第七号、一八七頁。また、村上謙介「父の事ども」文学会編輯部『文学部回顧』一九三二、一三八～一三九頁を参照のこと）。

『文学部回顧』は、村上を「高等学部」文学部の宝」と名付け、「又と得難い偉い人物で素晴らしく高く深く広いといふ、人格、学識共に群を抜いて優れてゐた近來希に見る大人物」であると書いています。さらに「学は和漢洋を該ねてゐられたが朴实敦厚、世才にたけて居らない」ため

に、「学院行政上では常に下積み」であったが、「超然として道を楽しみ、悠々として清貧に甘んじひたすら己れの学問と学科とのために全生を献げて居られた」「古武士の如き面影」がある人物と書いています。その村上の「勿論漢文の造詣深き事は当然であるが、独逸語で日記を書き、英語は一通り以上、英文学書を自由に読み、其上フランス語までやられた」にもかかわらず、「外人と話をする時には絶対に英語も何も使はず徹頭徹尾日本語で通した」「頑固さ」を持つ「真に日本的なる基督者」(一三四—一三八頁)であったと書いています。

この日記抄の著者で、日記にもしばしば登場する息子謙介(一八九七年四月五日—一九四六年五月五日)は、一九一〇(明治四三)年に関西学院普通学部に入學し、一五(大正四)年に高等学部文科に進學し、一九(大正八)年に卒業しました。その後二〇(大正九)年九月京都帝国大学文学部に入學し、英文学を専攻しました。卒業後の二三(大正一二)年四月、中学部教員に就任しました。謙介は、関西学院の最初の学院史である『開校四十年記念 関西学院史』(一九二九)の編纂・執筆に従事し、一九四四(昭和一九)年には中学部教員から関西学院総務部に転じ、学院史編纂主任として『関西学院五十年史』

(一九四〇)の編纂にも従事しました。彼にも学院史編纂室の所蔵する日記『甲東落葉籠』(一九三〇—一九三九)があります。

なお、関西学院の教職員の日記・記録類の内、すでに翻刻されたのは、『関西学院青年会記録—明治二二年一月—大正五年一〇月—』(関西学院キリスト教主義教育研究室『関西学院キリスト教教育史資料Ⅰ・Ⅱ』一九七六・一九八〇)、『村上博輔日記抄』、今田寛『為万世太平(抄)—今田恵の日記(一九四五年八月一五日—九月二〇日)—』(『関西学院史記要』第七号、一八九—二〇二頁)、中條順子『伯母田中喜美代の『阪神大水害』被災記録』(『関西学院史記要』第一七号、二三—二四八頁)です。なお、『曾木銀次郎日記』(一九〇一—一九〇二、一九二八—一九三七、一九四九—一九五二)、村上謙介『甲東落葉籠』(一九三〇—一九三九)など、関西学院にかかわる手書きの第一資料の発掘と翻刻は今後も継続される必要があり、学院史編纂室はその仕事の一端を担うことが必要です。

最後になりましたが、本日記の翻刻・注記に際しては、以下の方々のお世話になりました。記して深く感謝いたします。

本資料の翻刻には、元関西学院大学大学院文学研究科大

学院生山下真弘さん、永野啓子さん、大学図書館嘱託職員
の井戸田史子さん、羽田真也さんの多大なるご協力を得ま
した。記して感謝の意を表します。また、注記の調査およ
び原稿の完成のために、学院史編纂室の花田司さん、比留
井弘司さん、桑代正一さん、川崎啓一さん、高木久留美さ
ん、辻美己子さんに多大なるご協力を頂きました。翻刻を
終えるにあたって、改めてお礼を申し上げます。

井上 琢智